

第2回
福岡県グローバル青年の翼
Global Wings of Fukuoka Youth
2017 報告書

“Think Globally, Act Locally”

INDEX

page	
2	知事あいさつ
3	団長あいさつ
4	事業概要
5	事務局・団員名簿
6	第1次研修
7	第2次研修(フィールドワーク)
10	第3次研修
11	海外研修 日程表
12	第4次研修(海外研修)
26	第5次研修
27	副知事表敬
28	第6次研修(フィールドワーク)
31	団員レポート
43	事務局から一言
44	Special Thanks to
45	Snapshots with Message
52	募集要項

国際的な視野を持ち、 地域で活躍する人財の育成を目指して



福岡県知事
小川 洋

急速に進むグローバル化や地方創生の機運の高まりなど、われわれの社会は大きく変化しています。

このような中、次代を担う若者には、広く世界に目を向け、チャレンジ精神旺盛な高い志を持ち、社会の発展に貢献することが期待されており、異文化を受け入れ、海外の人々とも積極的に交流できる、グローバルな視野を持った若者の育成が重要です。

また、これからの福岡県の発展を考えると、成長著しいアジアの活力を取り込み、アジアとともに発展していくことが求められています。このため、県では、躍動するアジアの現状を肌で感じ、国際的な視野を備えた青年リーダーを育成する「福岡県グローバル青年の翼」を実施しています。

今年度は、23人の若者たちが、ミャンマーのバガンとパコック、ヤンゴン、そしてマレーシアのクアラルンプールを訪問し、現地の青年たちや現地に進出している県内企業の皆さん、社会貢献活動に取り組む国際NGOの皆さんと意見交換するとともに、アジア市場の現場を視察し、「人材育成・教育」「観光・インバウンド」「食・フードビジネス」など、自分たちが設定したテーマで自主研究活動に取り組みました。

また、海外研修の前後には、福岡県を取り巻く歴史や現状、県内企業による国際貢献や県内NPOによるソーシャルビジネスなどについても学んだほか、団員自らが企画したフィールドワークにも取り組みました。

これらの経験は、参加された団員の皆さんにとって、貴重な体験であり、かけがえない財産になったことと思います。皆さんが、この「福岡県グローバル青年の翼」で学んだことを糧に、地域のリーダーとして活躍されることを、心から期待しています。

県ではこれからも、「ふくおか未来人財育成ビジョン」に基づき、“Think globally, act locally”国際的な視野を持ち、職場や団体など、地域で活躍する「人財」の育成に取り組んでまいりますので、皆さまのご理解、ご協力をお願いします。

最後に、本事業の実施に当たり、ご尽力いただいた福岡県グローバル青年の翼実行委員会をはじめとする関係の皆さまに心から感謝申し上げます。

成長し続けることを期待しています



団長 私学振興・青少年育成局長
野田 律子

平成29年度の「福岡県グローバル青年の翼」は、9月上旬の第1次研修から始まり、自主的なテーマを持って挑んだ第2次研修、渡航直前の第3次研修を経て、11月5日から12日までの7泊8日の日程で、ミャンマーとマレーシアの2か国を訪問しました。

ミャンマーはアジア最後のフロンティアと呼ばれ、世界的にも注目を集めている活気に満ちた国です。まず、公益財団法人オイスカのパコック研修センターを訪問し、ミャンマー中部の痩せた乾燥大地が、長年の日本の技術協力により緑豊かな農地になっていることを体感しました。さらに同研修センターで祖国ミャンマーの未来のために農業技術を学ぶ青年達との共同生活を通じ、団員の皆さんは大きな刺激を受けるとともに、異文化の壁を越え友好関係を築く素晴らしい時を過ごすことが出来ました。また、ヤンゴン郊外にある「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」を訪ねた際には、先の大戦で亡くなられた本県出身の戦没者を弔う慰霊碑への献花を通じて、あらためて団員全員が平和の尊さを感じることができたことと思います。

次に訪問したマレーシアは、多くの民族・文化・宗教が共生する多民族国家です。

首都クアラルンプールでは、華人系小学校で人種や言語が異なる中で共に学ぶ子ども達と触れ合うことが出来ました。また、政府機関からマレーシアのインバウンド政策についてのレクチャーや、イスラム社会の中で奮闘する日本企業のハラール戦略の見聞等、非常に高いレベルの視察を実施することができました。訪問先では三つのテーマごとに、事前研修での調査を活かして深く掘り下げて訪問先で質疑を行い、それぞれのテーマについて学びを深めました。

ミャンマーとマレーシアは経済的な発展の状況で見ると対照的な国でしたが、地域のために活動する現地の方たちと交流し、その情熱に触れ、感銘と刺激を受け、多くのことを経験する貴重な機会であったと思います。

最後に、半年に及ぶ研修を成し遂げたことは、皆さんにとって大きな自信になるとともに、共に取り組んだ団員の仲間との友情は、これからの人生にとってかけがえない財産になることと思います。この研修を通して学び、体感し、多くの方たちと交流した経験を、それぞれの地域や職場で活かし、さらに成長し続けていかれることを心より期待しています。

1 趣旨・目的

県内青年に、世界(アジア)を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

2 概要

(1) 団員 23名

(2) 研修内容

① 第1次研修(宿泊) 9月2日(土)～3日(日) 郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等	⑤ 第5次研修(宿泊) 12月2日(土)～3日(日) 海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等
② 第2次研修(フィールドワーク) ①と③の間の任意の日 海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察	⑥ 第6次研修(フィールドワーク) ⑤と⑦の間の任意の日 海外研修を受けての県内実践活動
③ 第3次研修(宿泊) 10月14日(土)～15日(日) 訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等	⑦ 報告会 3月25日(日)「ふくおか若者魁大会」 研修成果報告会
④ 第4次研修(海外研修) 11月5日(日)～12日(日) 現地進出企業や産業インフラ、NPO法人、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設の視察・体験、現地で活躍する日本人などとの交流等	

(3) 海外研修 日時 平成29年11月5日(日)～12日(日) 7泊8日

訪問先 マレーシア(クアラルンプール)、ミャンマー(ヤンゴン、バガン、パコック)

(4) 参加資格 平成29年4月1日現在で、満18歳以上30歳以下の県内居住者(企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的視野を身につけ企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者)

(5) 実施主体 福岡県グローバル青年の翼実行委員会(福岡県、福岡県青少年団体連絡協議会、(公社)福岡県青少年育成県民会議、(公財)福岡県国際交流センター、(公財)オイスカ西日本研修センター、NPO法人ふくおかNPOセンター、青年の会、JETRO(日本貿易振興機構福岡貿易情報センター))

氏名	性別	所属・職業		役職
野田 律子	女	福岡県私学振興・青少年育成局	局長	団長
藤川 為廣	男	福岡県私学振興・青少年育成局	青少年育成課 事務主査	副団長

班	氏名	性別	所属・職業		役割	テーマ別
1	安部かりん	女	学生	北九州市立大学 文学部 比較文化学科	記録・報告書編集	人材育成・教育
	阿部 竜弥	男	社会人	西日本鉄道 株式会社 住宅事業本部	企画係	観光・インバウンド
	伊藤 大将	男	学生	北九州市立大学 外国語学部 英米学科	サブ・リーダー	食・フードビジネス
	片山 歩美	女	学生	北九州市立大学 外国語学部 国際関係学科	記録・報告書編集	観光・インバウンド
	金高 誠生	男	市町村	川崎町役場 住宅課 住宅管理係	記録・報告書編集	観光・インバウンド
	末永 瑞穂	女	学生	福岡大学 人文学部 ドイツ語学科	企画係	食・フードビジネス
	高橋和佳子	女	学生	九州産業大学 国際文化学部 国際文化学科	企画係	人材育成・教育
2	田中 愛	女	社会人	学校法人 福岡女学院 法人本部 広報・校友課	リーダー	人材育成・教育
	樽林 万葉	女	学生	福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科	企画係	観光・インバウンド
	小池 恭兵	男	社会人	株式会社 福岡銀行 糸島支店	リーダー	観光・インバウンド
	平 ひかり	女	学生	帝京平成大学 現代ライフ学部 経営マネジメント学科	企画係	食・フードビジネス
	野坂 ゆい	女	学生	北九州市立大学 外国語学部 国際関係学科	記録・報告書編集	人材育成・教育
	原島 真衣	女	学生	福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科	企画係	食・フードビジネス
	福田 小夏	女	学生	九州大学 教育学部	記録・報告書編集	人材育成・教育
3	藤原 奈々	女	社会人	杉村包装資材 株式会社 管理部	サブ・リーダー	食・フードビジネス
	山崎 一輝	男	社会人	九鉄工業 株式会社 北九州支店 土木課	記録・報告書編集	人材育成・教育
	興梠 汐音	女	学生	西南女学院大学 人文学部 観光文化学科	企画係	観光・インバウンド
	鳥嶋日菜子	女	学生	福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科	企画係	観光・インバウンド
	濱砂 悠	男	市町村	大刀洗町役場 建設課 管理係	リーダー	人材育成・教育
	堀口 貴広	男	社会人	タカ食品工業 株式会社 業務課	記録・報告書編集	食・フードビジネス
	村上 瑞麗	女	学生	北九州市立大学 文学部 比較文化学科	サブ・リーダー	観光・インバウンド
3	安村 夏希	女	学生	福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科	記録・報告書編集	食・フードビジネス
	横大路貴哉	男	社会人	正興電機 株式会社 電力営業部	記録・報告書編集	食・フードビジネス

第1次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2017年9月2日(土)～3(日)

研修の始まり。福岡、東南アジアを様々な角度から学ぶ。

福岡県グローバル青年の翼2017の第1次研修が始まった。この日が初めて団員同士が顔を合わせる日となるため、みな緊張した顔つきで静かに研修が始まるのを待っていた。

初日の午前中は、日本貿易振興機構アジア大洋州課北見創様より、「マレーシア及びアセアンの概要について」、そして中村学園大学教授占部賢志様より、「世界の中の日本～グローバル・ヒストリーの視点から～」についての講義を頂いた。北見様からアセアンの成長の様子、日本とのかかわり、マレーシアの経済や今旬の話題を説明して頂き、今日の東南アジアの目まぐるしい経済成長について知ることができた。占部教授の講義では、海外に出る前に日本人として日本のこと、また自分のことを知り、それを他の人に伝える重要性について気付かされた。

午後の講義では、田中藍株式会社常務田中克明様より、「グローバル戦略と人材育成」についての講義を頂いた。田中様からは、田中藍株式会社の海外への事業展開や福岡の世界に誇れる産業のお話を聞くことができ、あくなきチャレンジスピリット、時代の先見性について教えて頂いた。

その後の生活班ごとの活動では、役割分担やマンマーで行われる夕食交歓会の出し物について話し合った。徐々にみな緊張は解れ、楽しそうに意見を交わしていた。

1日目の夜には、県職員の方々を含め団員全員での懇親会が行われた。1人ずつ自己紹介していき、今日会ったばかりとは思えないほど打ち解けていた。

2日目の午前中は、ビジネスデザインラボ代表神田橋幸治様より、「ベンチャー支援の現場から見た、福岡地域の可能

性」、そしてオーケー食品工場株式会社海外営業室長本松様より、「海外展開とハラール取得 ムスリム市場へのアプローチ」についての講義を頂いた。神田橋様からは、これまでの官民両組織での経験から福岡のイノベーション都市としての強み、ベンチャー企業への支援体制、官民の連携が強化されることで生まれる可能性について教えて頂いた。福岡の地域戦略について深く学ぶことができた。本松様からは、初めに研修にあたる前の心構えについて教えて頂き、身の引き締まる思いだった。また、イスラム教の慣習や日本との違い、ハラール認証取得の厳しさを学んだ。

午後の講義では、公益社団法人福岡県観光連盟観光推進プロデューサー豊島茂様より、「インバウンドの現状と、九州・福岡の観光戦略」についての講義を頂いた。豊島様より、福岡の観光客の推移や観光客を誘致するための新たな取り組みを知り、流行ののったアイデアが重要だと知った。

その後はテーマ別のチームに分かれ、第2次研修の分野別訪問先決めを行った。同じテーマといっても、みなそれぞれの目的を持っており研修先を絞るのに苦労した。だが、意見を交わすうちに最終的には一つにまとまり、同じ目標を共有することができた。

こうして、2日間にわたる第一次研修が無事に終了した。最初の緊張が嘘のように、研修の終わりには笑顔で溢れていた。団結力も高まり、次回の研修への期待が膨らむ研修であった。

(文責:片山歩美)

講義名	講師
「マレーシア及びアセアンの概要について」	北見 創 日本貿易振興機構 アジア大洋州課
「世界の中の日本～グローバル・ヒストリーの視点から～」	占部 賢志 中村学園大学 教授
「グローバル戦略と人材育成」	田中 克明 田中藍株式会社 常務
「ベンチャー支援の現場から見た、福岡地域の可能性」	神田橋幸治 ビジネスデザインラボ代表
「海外展開とハラール取得 ムスリム市場へのアプローチ」	本松 洋 オーケー食品工業株式会社海外営業室長
「インバウンドの現状と、九州・福岡の観光戦略」	豊島 茂 (公社)福岡県観光連盟 観光推進プロデューサー



東南アジアの現状について語る北見様



日本について学ぶ大切さを説く占部様



グループディスカッションする団員

第2次研修 (フィールドワーク)

2017年 9月26日(火) リンデンホールスクール小学部 (午前)
大刀洗町立大堰小学校 (午後)

人材育成・
教育チーム

私立・公立小学校の視察を通して、福岡県内のグローバル教育について考察した。

人材育成・教育チームでは、マレーシアでの海外研修を前に、県内の小学校における英語教育を視察することにした。今回、海外研修で訪問するマレーシアの小学校には、異なる文化や宗教を持つ、様々な子ども達がいると考える。

現在、福岡でも多くの外国人が暮らしており、様々な場面で、外国人とともに学ぶ機会が増えている。それは小学校も例外ではない。そこで、日本人と外国人の子ども達が、英語で学ぶ太宰府市の「リンデンホールスクール小学部」を訪問し、県内における最先端の英語教育と、異文化を超え、ともに育つ子どもたちについて教えていただいた。

私立の小学校訪問の後、大刀洗町にある大堰小学校を視察した。ここでは、公立小学校の一例として、英語教育や、子ども達の国際的視野を広げる取り組み等についてうかがった。

リンデンホールスクール小学部

太宰府市にあるリンデンホールスクール小学部は、アメリカ最古の学校「リンデンホール」と姉妹校の都築学園によって2004年に開校された。国語以外のほとんどの授業を英語で教える英語イメージプログラムを採用し、真の国際人を育成する教育を行っている。幼少期の教育環境でこのような学校は少なく、九州では唯一ということもあり、生徒は日本全国から訪れている。また、外国籍や両親が外国人であるなど、帰国子女も多い。そのため、子ども達はそれぞれに異なる文化や習慣、また価値観を持っているわけだが、学校側は子ども達一人一人へ特別な配慮は行っていないという。大人が言わなくとも、子ども達は自分の力でそれに付き、考えることができる。例えば食堂では、ハラール用の食事や、テーブルマナーについて教える掲示がなされていた。校内ではこのような子ども達の「気づき」に働きかける、きっかけを与えるものが多く見られ、大変興味深かった。

また、英語中心のコミュニケーションの場において、日本の文化や伝統を重んじ、日本で生きる子ども達に、日本人としてのアイデンティティを育む心の教育がなされていたことには大変感銘を受けた。世界で通用する国際人とな



リンデンホールスクール小学部にて



大刀洗町立大堰小学校にて

るにあたり、世界共通語の英語で話す力は不可欠だが、今いる日本について幼少期から考え、日本の道徳、和の心から真の国際人を育む姿勢は、大変共感できる部分であった。

大刀洗町立大堰小学校

大刀洗町には、町内に4つの小学校があり、地域で子どもを育てる、学校を核とした地域づくりが行われている。大堰小学校は、創立108年、児童数は約100名で「地域と共に発展する」という教育目標を掲げる学校である。保護者と地域が連携し、子ども達を育て、見守っている点は、公立の小・中学校に共通する点だといえる。

来年度から小学校でも英語教科が始まるのを前に、会話を中心とした学習環境をつくるため、音声CDやDVDの活用、教室にはデジタルテレビが設置される等、英語教育への準備が着実に進んでいる様子が見られた。また、給食時には、日本や外国の献立と食文化を紹介しているという。子ども達にとって親しみやすいもので、外国に視野を広げる取り組みがうかがえた。外国人の両親を持つ生徒は多くないが、そうした児童・保護者への支援や配慮はもちろん、負担削減も行われている。

今回2つの小学校を視察し、教育現場の今に触れることができた。日本全体の少子化が進む一方、世界の人口は大幅な増加が予想されている。今後これまで以上に、日本に移り住み、私たちと生活を共にする外国人が増えることを考えると、子ども達の教育環境も、それに合わせて多様化していく必要がある。今、日本では、海外に興味がなかったり、外国に行くことに関心を示さない人が多い。そのため、外国人と接する際に、相手を理解するまでに抵抗があったり、差別をしたり、日本で暮らす外国人の孤立も懸念されている。今回の視察を通して、「異文化」としてとらえていたものの多くが、「個性」という認識に変わった。海外研修では、こうした個性に着目し、様々な人が学び、暮らす環境において、お互いを思いやること、共に育むことについて考えを深めていきたい。

(文責:田中愛)

**第2次研修
(フィールドワーク)**

2017年 9月22日(金) **キャナルシティ博多
博多リバレインモール by TAKASHIMAYA**

観光・
インバウンドチーム

福岡の「おもてなし」の心を知る。

観光・インバウンドチームは、2020年に開催される東京オリンピックの影響で、日本を訪れる外国人観光客が増加するなか、福岡県のショッピングモールが外国人観光客に対してどのような「おもてなし」をしているのかに着目した。そこで、現在行っているインバウンド施策や、感じているインバウンドの現状や変化についてのお話を伺うために、福岡市内の複合型施設である、キャナルシティ博多、博多リバレインモールbyTAKASHIMAYA（以下、博多リバレインモール）を訪問した。

キャナルシティ博多

顧客ターゲットとして、主に「観光客」に焦点を当てているキャナルシティ博多では、事業部の広報・インバウンド担当である津留加奈江様に話を伺った。キャナルシティ博多の外国人観光客の割合は、全体の2割程度であるが、実際に施設内を見てみると、日本人顧客よりも外国人顧客の方が多いように感じた。これは、日本人が個人で来ることが多いのに対し、中国人や韓国人は団体ツアーのように大人数で来ることが多いのが原因だと考えた。

キャナルシティ博多の、インバウンド施策は、SNS、多言語対応、案内所の3点において行っているそうだ。

SNSにおいては、海外発信を目的として、インバウンドチームが「LINE」、「twitter」、「facebook」、「instagram」の4つの公式アカウントで、写真や情報を提供し、魅力を広めていることが分かった。

次に、多言語対応に関しては主に、日本語・英語・中国語・韓国語の4か国語でほとんどの看板やパンフレットには書かれている。また、施設内各所に設置されている電子案内板もこの4か国語から選択できるようになっている。

最後に案内所については、2016年10月から「CANAL TOURIST LOUNGE」という外国人観光客向けの観光案内所をオープンした。キャナルシティ博多では、ここに、ほうじ茶やわらび餅が用意されているカフェラウンジや、着物の着付けや書道、折り紙体験ができる日本文化体験ブースを併設しており、4つのフロアに分けている。また、観光客向けのサービスでは、観光案内・施設案内のほかに、「かんたん言語講座」や「手荷物預かり」などを行っている。そして、こだわりの逸品販売コーナーでは、日本を訪れた思い出として持ち帰っていただけるものや、コミュニケーションのきっかけとなるものを販売している。



お話を伺った津留様



韓国語・中国語のパンフレット



真摯に答えてくださった柴田様



柴田様との集合写真

博多リバレインモールbyTAKASHIMAYA

顧客ターゲットを、「バス利用の団体ツアー客」ではなく、「旅慣れた個人観光客」としている博多リバレインモールでは、営業担当チーフの柴田恭男様に話を伺った。現在行っているインバウンド施策については、伝統工芸品・県産品、多言語対応の2つが挙げられた。

最近個人観光客は、博多織や陶器といった「日本の質のいいもの」を求める人が増えており、そこで博多リバレインモールでは、福岡県と協力した県産品コーナーである「る・はかた」を設置した。ここでは、福岡で活躍するアーティストの方々や約30のブランドの手作り商品に加え、本物志向にこだわったオリジナル商品を扱っている。また、ワークショップ等のイベントを通じて、コミュニケーションの場としても展開している。

多言語対応としては、キャナルシティ博多と同様の4か国語で、冊子やパンフレットを制作している。冊子には博多リバレインモールで利用できるクーポンをつけ、これらを福岡県内の案内所やホテルに設置することで、施設利用客の増加を促している。さらに、施設内のパンフレットには取扱商品である日本・博多の特産品の紹介を掲載している。

また、旅慣れた個人観光客のニーズが「日本の質のいいもの」に変化していることから、日本人と外国人に対する接客の違いをつけたり、外国人向けに特化したコーナーを設置したり、免税店の出店を行うことは、博多リバレインモールにおいて必要ではないとのことであった。日本人にしても外国人にしても、博多リバレインモールを訪れる人々は皆、同じ目的を持っているからだ。

この2次研修を通して、「おもてなし」とは、「日本人だから」、「外国人だから」という切り口ではなくターゲット顧客に対して如何に日本・福岡を楽しんでもらえる環境づくりを行うかであり、多言語対応はあくまでもそのツールの一つであると感じた。そして、これからの日本社会の未来を担っていく私たち若者にとって、グローバル化していく中で積極的に異文化を理解し、受け入れるとともに、日本文化をしっかりと維持・形成し、それらを世界中の国々に発信していくことが重要視されると考えた。

(文責：村上瑞麗)

**第2次研修
(フィールドワーク)**

2017年10月3日(火) **石橋工業株式会社**

食・フード
ビジネスチーム

日本の食文化を売り込み、大麦を通して健康に

現在日本は、少子高齢化に伴い、内需が減少しており海外に販路を拡大していく必要がある。そこで食・フードビジネスチームは日本の独自の食文化を海外に輸出している企業という観点から大麦の精麦、販売を行っており、海外に対して製品の輸出を行っている石橋工業株式会社を訪問した。

石橋工業株式会社では、取締役の石橋様より本包含めグループ全体の説明と大麦についてお話しいただいた。

グループ全体では、精麦工場、倉庫業を行う工場、飲食店や料理教室を運営する七蔵グループがあり、大麦を通じて製造から販売、麦食文化の発信まで行っているとの事であった。

そして、大麦は米、小麦、トウモロコシに次ぐ生産量を誇る穀物であるが、直接口にするという食文化を持つ国は少なく、大半はビール生産、家畜の飼料として使用されているということも改めて教わった。

その後の工場見学では、本社精麦工場では年間1万5000トンの大麦の加工を行い、うち1万トンはオーストラリアなどの海外産、5000トンは九州を中心とした国内産であり、精麦の工程の違いによって丸麦、押し麦、米粒麦、切断圧縮麦と形を変え、それぞれ食感が異なること。また、本社工場には大麦を使ったお菓子として煎餅やグラノーラ、クッキーやお饅頭を製造していることなど、丁寧に説明頂いた。

最後に、海外進出に関して伺った。

最初に海外に出たのは2011年の東日本大震災後の8月に開かれた香港フードエキスポへの参加だ。当時は一部で原発事故の風評被害などもあったが、日本食の人気は高かったそうだ。

その後本格的に輸出を開始し、現在は賞味期限の関係上、

麦、雑穀ご飯を主に香港や台湾、シンガポール、北米に輸出。商品の大半は、小売り向けに販売されており、主な購入者は富裕層や、現地の日本人だそうだ。最近では、パンや、シリアルで大麦が使われることも増えてきており、シリアルバーなどに使われるほか、スーパーで大麦の量り売りなどの形態で販売されることもあるとの事であった。

また、キーポイントとして海外においても日本と同様に健康志向の高まりから、大麦に注目が高まっているという話があった。

近年、大麦はその栄養成分が認められ、機能性表示を認める国が増えてきている。アメリカでは日本のトクホにあたる、健康強調表示ができるようになった。

しかし、食品の海外進出するにあたっての一番の困難は賞味期限だそうだ。石橋工業株式会社の麦製品の中でもクッキーや煎餅お饅頭などは船で運搬する際に時間がかかりすぎ現地での賞味期限を十分に確保できないため輸出のネックになっているとのことだった。

大麦は踏まれても上に伸びようとし、生命力にあふれている。石橋工業株式会社ではそれにあやかって消費者の健康寿命を延ばしたい、大麦を通して健康に貢献したいとのことである。来る東京オリンピックで外国の方が多くやってくる。そのときに大麦を食べてもらいたいそうだ。

今回の訪問で印象的だったのは日本では麦ごはんは一般的に知られているが、海外ではその文化がないため、麦の使い方が全く分からないそうだ。そのため、ものを売ることも、食生活の提案、食文化を売り込むことが大事になるということだ。

新たな食生活の提案するためにも、日本の食文化を理解することは重要だと感じた。(文責：堀口貴広)



対応いただいた石橋様



大麦を使用した製品



講義中の様子



石橋工業株式会社の外観

第3次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2017年10月14日(土)～15(日)

最後の国内事前研修。ミャンマー・マレーシアの現状や海外から見た福岡について深く学び、海外研修での出会いや発見に思いを馳せた。

第2次研修としてのテーマ別チームごとのフィールドワークを経て10月14日(土)・15日(日)の二日間第3次研修が行われた。第3次研修ではまずオイスカ西日本研修センターの彦坂延良様からミャンマー・パコックの研修センターについてのお話をいただいた。オイスカは1997年にパコックに研修センターを開所。農業支援のみならず第6次産業化を目指す食品加工指導や地域の教育をも支えており、研修生はミャンマー全土から集まる。お話を聞きながら海外研修でのオイスカ研修生との出会いが楽しみになった。続いて株式会社メディカルグリーンの長根寿陽様よりミャンマーでの薬用植物栽培によるバリューチェーンの構築に関してのお話をいただき、気候や豊かな農業人口に起因するミャンマーの農業の可能性を知った。またBOPビジネスによる民間企業主導の開発という視点は国家やNGOによる支援とは異なるものでとても印象に残った。少数民族支援のための置き薬事業や麻薬の原料の生産に代替する蕎麦の生産の提案などはビジネスとして持続可能でありながら住民の生活改善を促す革新的な試みであると思った。午後にはフィールドワークの成果発表をテーマ別チームごとに行い、共有された学びをいかに海外研修に生かしているのか考えた。その後オイスカ研修センターでの夕食交流会やテーマ別視察の内容を検討した。二日目にはIT&IP

Strategy AdvisoryのAldo Bloise様、みずトランスコーポレーションの水谷みずほ様より海外から見た福岡の魅力と課題についての講義、続いてBloise様の奥様を交え海外研修での英語スピーチに備えての指導を受けた。諸外国からのアクセスが良くコンパクトで若い力のある都市である福岡の“Challenges”(=課題)に立ち向かうことで福岡はもっと魅力的になるだろうと感じ、また英語スピーチ指導では海外研修において訪問先の方々に私たちの思いを伝えられるよう表現を見直していただいた。午後からは北九州市立大学准教授の篠崎香織様よりマレーシアの歴史・民族・宗教についてのお話をいただいた。単一民族国家といわれる日本においては意識することが少ない民族としてのアイデンティティを保持してきたマレーシア社会の中で、より出自に縛られない「もう一つのマレーシア」を模索する側面も出てきたということが大変興味深かった。講義後は夕食交流会企画・テーマ別チーム視察内容について再度話し合いを重ねた。そして第3次研修の最後には結団式が行われ、講堂のピンと張り詰めた空気の中一人一人に団長より団員証が授与された。海外研修を間近に控え、国内研修で学んだことを自分の目で見て感じられるのだという高揚感とたくさんの出会いへの期待、少しの不安が入り混じる瞬間だった。

(文責：福田小夏)



オイスカ西日本研修センターの彦坂延良様
株式会社メディカルグリーンの長根寿陽様
みずトランスコーポレーションの水谷みずほ様とIT&IPのStrategy AdvisoryのAldo Bloise様
北九州市立大学准教授の篠崎香織様

講義名	講師
「ミャンマー・パコックの研修センターについて」	彦坂 延良 (公財)オイスカ西日本研修センター
「ミャンマーでの薬用植物栽培によるバリューチェーンの構築について」	長根 寿陽 (株)メディカルグリーン
「海外から見た福岡の魅力と課題」	Aldo Bloise IT & IP Strategy Advisory
「英語スピーチ指導」	水谷みずほ みずトランスコーポレーション
「マレーシアの歴史・民族・宗教について」	篠崎 香織 北九州市立大学 准教授



結団式にて団員証が手渡された



テーマ別視察に向けてのワークショップ



第4次研修 海外研修

日程表

日次	月日(曜) DATE	都市名 CITY	現地時間 TIME	スケジュール SCHEDULE
DAY 1	2017年 11/5 SUN	福岡空港	08:45	国際線2階
		福岡発	11:40	TG-649
		バンコク着	15:40	TG-305
		バンコク発	18:05	
		ヤンゴン着	18:50	
				ヤンゴン泊
DAY 2	11/6 MON	ヤンゴン発	06:30	7Y-111
		ニャンウー着	07:50	
		エサジョ着	午前・午後	○オイスカ研修センター視察 ○現地の村や小学校訪問など
			夜	○オイスカ研修センターでの夕食交流会
				研修センター泊
DAY 3	11/7 TUE		早朝	○朝礼参加 ○農業体験 ○研修センター近郊の町(パコック)視察
			午後	○バガン遺跡群見学
		ニャンウー発	17:05	K7-207
		ヤンゴン着	18:25	
			夜	○夕食会(ミャンマー在住の方3名)
				ヤンゴン泊
DAY 4	11/8 WED		08:00	○福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑献花
		ヤンゴン発	11:15	MH-741
		クアラ Lumpur 着	15:40	
				クアラ Lumpur 泊
DAY 5	11/9 THU	クアラ Lumpur	09:30	○華人系小学校SJK(C) Kepong1 (人材育成・教育)
			14:30	○SPAD：陸上公共交通委員会
			16:30	○マレーシア政府観光局(観光・インバウンド)
				クアラ Lumpur 泊
DAY 6	11/10 FRI	クアラ Lumpur	09:15	○HDC：ハラル産業開発公社
			13:00	○キューピー・マレーシア(食・フードビジネス)
			15:00	○イオン Mega Mall
			18:30	○マレーシア夕食交流会
				クアラ Lumpur 泊
DAY 7	11/11 SAT	クアラ Lumpur	終日	○クアラ Lumpur 市内・近郊視察 セントラルマーケット、国立モスク、独立広場、KLタワー、 プラジャヤなど
		クアラ Lumpur 発	21:05	TG-418
		バンコク着	22:10	
				機内泊
DAY 8	11/12 SUN	バンコク発	01:00	TG-648
		福岡着	08:00	
				着後、解散

出発式・移動(福岡⇒バンコク⇒ヤンゴン)

11月5日(日)

新しい出会い。膨らむ期待に背中を押されて

ヤンゴンに立ちこめる砂ぼこり、鳴り響くクラクション、知らない言語が飛び交う道路。

私たちは目に見えないエネルギーに圧倒された。

数時間前、福岡空港に眠気に耐えつつ集まった団員全員。国内研修ぶりの再会に喜びあっていたのはつかの間、すぐに出発式を迎えた。誰もが今までに経験したことのない旅路につくとあって、どこか緊張感だけでなく、高揚感が室内に漂っていた。「福岡県の代表として本物をその目に焼き付けてください。」という言葉がかけられて、この旅の目的を再認識すると共に、覚悟が芽生えた瞬間であった。

そしていよいよ、飛行機に乗り込む。機内への足取りは軽かった。そして私たちは小さくなっていく福岡の街に明るく別れを告げた。

6時間のフライトを終えると、少し酔気に苦しみながら、タイの空港に到着した。まさにアジアの玄関と言わんばかりの空港は、華やかな装飾やオリエンタルなショップが立ち並び、

食事にも多様性があり、小規模な世界フードフェスティバルのようだった。それからヤンゴン行きのフライト時間までタイでの短い滞在時間を各々楽しんでいた。タイの食

事を楽しんだり、買い物をしたりとつかの間のタイ旅行を満喫した。

満員に近い飛行機に乗り換え、いよいよヤンゴンへ。あっという間のフライトであったが、少しずつ団員には疲れの色が見え始めた。眠りから覚めるとそこは日もすっかり暮れたヤンゴンだった。

たどり着いた喜びからか団員の口には笑みがこぼれていた。日本の空港とは違う雰囲気には驚きつつも、ついに心待ちにしていた6日間が始まると内心は飛び上がりた気持ちだった。

大きな観光バスに乗り込むと、バスはオレンジ色の街頭でぼやけたヤンゴンの中心地を抜けていった。それより、クラクションが鳴り止まない。四方から鳴り響く音に最初は戸惑っていたが、次第に興味深さに変わっていった。ミャンマーのほとばしる熱量とさえ思えて来るほどだった。食事を終え、ホテルに着くとすっかり、団員の表情には安堵と時差からくる眠気が滲み出ている。明日はオイスカ研修所の訪問が待ち受けている。なにが起こるのだろうかところを弾ませつつ、体を少し休めた。

(文責：高橋和佳子)



Bon voyage! 福岡空港にてみんな笑顔で一枚。



タイの空港内でタイ料理に舌鼓。タイ旅行気分を味わう数時間。



元気いっぱいのガイド、オンマさんのお出迎え。すてきなほほえみに安堵。



夕暮れ時のヤンゴン。声が飛び交い、満ちる活気。

ミャンマー／AM 移動・オイスカ研修

11月6日(月)

日本から遥か遠くのミャンマー、パコックにて。日本の国際NGOであるオイスカがどのような事業を行っているのか視察した。

海外研修2日目の起床時間は朝4時。あたりはまだ薄暗いヤンゴン市内を抜けて空港に向かった。初めてのプロペラ機は想像していたよりもずっと小さく、団員たちはみな少し緊張しながら乗り込んだ。1時間強のフライトを終えバガン・ヤンウー空港へと到着。舗装されていない道路の上をバスで走りながら窓の外を眺めると、見えるのは藁葺屋根の家や田んぼばかりで、日本ではもうなかなか目にすることのない景色が私たちにとても新鮮に感じた。そして2時間ほどバスに乗っていると、ようやく私たちの目的地ミャンマー・オイスカ研修センターが見えてきた。

センターに到着すると、研修生たちが温かく迎え入れてくれた。「ミンガラバー(こんにちは)」と挨拶しながら私たちは一晩お世話になる宿舎にそれぞれの荷物を運んだ。宿舎は造りがしっかりしているうえに綺麗で、非常に快適そうな印象を受けた。

宿舎からセンターに移動し、モウ・インさんからセンターの説明を受けた後、私たちはセンター内の見学をさせていただいた。ミャンマーにも拠点を置いているオイスカは日本発の国際NGOで、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てる世界」を目指し、1961年、中野與乃助氏を中心として立ち上げられた。ミャンマーにおいては、人材育成事業を中心として、地域開発事業、環境保全事業の3事業を実施し、持

続可能なふるさとを守り育てるための取り組みを行っている。

センター内の見学中はこのセンターにおいて一番の主力となっているコメの栽培を中心に見せていただいた。ミャンマーの多くの農家がコメの栽培の際、化学肥料や農薬を大量に使用しているのに対して、オイスカのコメは農薬を全く使用せず、有機栽培を行っている。もともと大変強いアルカリ性の土・水で作られていた田んぼだが、ぼかし肥料等によって、何年もかけて土を改良し、また5kmも先の井戸から引いた水を用いることによって、無農薬のコメの栽培に成功したそうだ。

センター内にはほかにも、キャベツやダイコン、ニンジンなど多種多様な野菜を育てている野菜畑があり、トイレやシャワー等の排水を浄化した灌漑水を使用して野菜の栽培を行っていた。また、養豚場では生まれてまだ数日の小さな子ブタから大きく成長した大人のブタが丁寧に育てられていた。

このセンターは農業だけではなく人材育成も事業の一環として行われており、リーダーとなるには知識・技術、人格・品性、信念・情熱のすべてを持ち合わせる必要があると考えている。そのため研修生それぞれに責任のある仕事を割り当てており、研修生はみな自らの仕事を生き生きと行っている様子が非常に印象的であった。

(文責：樽林万葉)



オイスカ研修センターまでの道のり。舗装されていない道が多々見受けられた。



収穫真っ盛りの稲。



私たちが一晩お世話になった宿舎。



ミャンマー・オイスカ研修センターは2016年11月で設立20周年を迎えた。

ミャンマー / PM 研修&夕食交歓会

11月6日(月)

小学校訪問、夕食交歓会を通じて、コミュニケーションをとるだけでなく、一生忘れることのできない、出会い・思い出が出来た。

研修生とのグループディスカッション

午後からは、オイスカの研修生とグループディスカッションが行われた。最初は緊張した面持ちで始まったディスカッションだが、自己紹介を行い、互いの国の文化や生活について教え合ううちに、各所から笑い声が響き、自然と会話が飛び交うようになった。ディスカッション中に、ミャンマーと日本のアルバイトの違いの話になった際、ミャンマーでは1日他人の家の手伝いをすると、3000チャットの給料が与えられるという話があった。これは日本円で約300円ではない。この話を聞いたとき、日本とミャンマーの経済面での違いについて再度驚かされた。また、日本についてどのような印象を持っているかと尋ねたところ、「自由な国、豊かな国、憧れの国」という答えが返ってきたことが、とても印象的だった。グループディスカッションを通し、研修生達の農業に対する意欲に驚いたとともに、将来について明確なビジョンを持っていることに感心した。

エサジョ村での小学校訪問

研修生達とグループディスカッションを行った後は、エサジョ村へ視察に訪れた。エサジョ村の家や道具の使用方法について教えていただいた後、小学校に向け出発した。小学校に到着し正門をくぐると、子供たちが列を作り笑顔で出迎えてくれた。この光景に団員たちは、驚きながらも嬉しそうに手を振り返っていた。列の間を通り抜け講堂の中に入ると、すでに多くの村人や生徒が待っていた。風通

しがよくどこか落ち着く雰囲気の講堂では、子供たちが色鮮やかな衣装をまとい、ミャンマーの伝統的な踊りを披露してくれた。どの曲にも団員たちは手拍子を送り、また子供たちも一緒に歌い、講堂内は非常に盛り上がった。初めて見聞きするミャンマーの伝統的な踊りや曲は、とても新鮮であり魅力的で、今でも私たちの耳に残っている。

夕食交歓会

夜には、グローバル青年の翼の団員とオイスカのスタッフ・研修生との夕食交歓会が行われた。団員代表として鳥嶋さんの挨拶があった後、団長の言葉で乾杯が交わされた。研修生達は、ミャンマーの伝統的な踊りを披露してくれた。全5曲あった踊りに団員が数々加わり、踊りを通じてコミュニケーションをとることができた。また、団員からはソーラン節やじゃんけん列車・クイズ・椅子取りゲームを行った。どの班の出し物にも、研修生やスタッフが参加し、日本の景品を受け取る彼らの顔からは、楽しんでいる様子うかがえた。そして、会場内では一緒に踊る姿や、談笑する姿、民族衣装であるロンジーの巻き方を教えあう姿など、各々が交歓会を楽しんでいる光景を見ることが出来た。最後には、団員・研修生・スタッフが入り交じり会場内で大きな輪をつくり、「幸せの踊り」を全員で踊った。その名の通り、全員の顔には終始幸せそうな顔が浮かんでいた。こうして、18時半から22時過ぎまで行われた夕食交歓会は幕を閉じた。

(文責：興裕夕音)



研修生と話し合っている様子



子供たちによる出し物



団員と研修生が伝統的なダンスを行っている。



小学校で集合写真撮影

ミャンマー / AM オイスカ研修

11月7日(火)

初めての農業体験！ 青空のもと、研修生とともに汗を流す

オイスカ研修センター二日目、私たちは五時に起床し、研修生たちが毎日行っている朝の朝礼とラジオ研修に参加しました。研修生たちの朝五時と思えない徹底した集団行動と、元気な大きな声には驚きました。

朝食後、私たちは稲刈りに挑戦しました。以前は乾燥した作物を作るには過酷な大地でしたが、誰からも無謀と言われた土地の改善に日本のNGOが貧困削減・生活改善プロジェクトに取り組みました。その結果、私たちの目の前には一帯に豊かに実った稲穂が美しく頭を垂れていました。実際の仕事は稲を刈るという一見簡単そうに見える作業ですが、これがなかなか上手く刈り取ることが出来ず大変苦労しました。“見るとする”とは大違いでした。研修生が指導してくれたおかげで、コツをつかみ徐々にスピーディに稲刈りを行えるようになりました。一時間程度の作業でしたが、かなり広範囲の稲を収穫することができました。慣れない仕事に汗を流し、真剣に取り組んだ分、日常では感じる事が出来ない、達成感と爽快感を実感することができました。

交流会で研修生たちに“将来の夢は何か”と尋ねたところ、多くの研修生がオイスカ研修センターで学んだ経験と知識をそれぞれの生まれ育った地域へ持ち帰り、農業を通じて家族を支え、街の発展に貢献したいと話していました。

そんな彼らの夢の実現のための一生懸命な姿勢、学ぶ事への情熱には大いに学ぶものがありました。「フロンティア」として世界の注目を集めているミャンマーの農業は、外国政府の援助や企業の進出、制度変化といったうねりの中、生産性向上や貧困削減といった目標の達成に向けて国も力を入れていきます。

現在日本では、若者の農業離れや人手不足に直面しています。この問題は今後、社会・経済的に発展していくとともに、ミャンマーも将来経験する課題だと思えます。そのためには、研修生自ら地域のリーダーとして技術に加え、農業が持つ力や魅力、農業進行の必要性を発信していくとともに、農業の効率化を図るためには機械化の推進も検討することが大切だと感じました。

研修生や職員の方々に別れを告げ、次に私たちはパコックの市場の視察に向かいました。市場では想像以上に商人や買い物客で大変賑わっており、圧倒的なパワーと活気を感じることができました。ミャンマーはまだまだ発展途上にある国ですが、工業化や各国からの投資が押し寄せている様子や若者で溢れる街の活気、エネルギーはこの国のますますの発展を予想させ、大きく変容することを確信させるものでした。

(文責：伊藤大将)



オイスカの研修生たちと



ミャンマーの刺繍に興味津々



パコック市場の視察



初めての農業体験



買い物客で賑わうパコック市場

ミャンマー／バガン視察、ヤンゴン夕食交流会

11月7日(火)

広大な緑の中の無数の遺跡、黄金に輝くヤンゴンのパゴダに感動し、ミャンマーの発展に様々な領域から寄与する日本人の方々と夕食会で貴重なお話と共に、知識を深めた。

バガン遺跡視察

バガンに到着した団員は、アーナンダ寺院、シュエサンダー・パゴダ、シュエズィーゴオン・パゴダを視察し、立派な寺院を裸足で視察するという新しい経験はとて新鮮であった。その後、空路でヤンゴンへ到着し、シュエダゴン・パゴダを視察したが、それは暗闇の中黄金の光で輝き、どの景色を切り取っても美しい寺院であった。

ヤンゴン夕食交流会

そして、ミャンマーでの最後の夕食は、ヤンゴンに在住し様々な領域で活躍されている日本人3名の方と共にした。Japan SAT Consulting Co Ltd.で代表取締役を務められる西垣充氏は、1996年にミャンマーの拠点を持ち、日系企業の進出支援、ミャンマー人材紹介、メディア取材のコーディネート、様々な事業を手がけミャンマーの発展に寄与されている。このように様々な角度からミャンマーの現状を知る西垣氏は、ミャンマーでビジネスを始めようと思ったきっかけについて、ミャンマーは発展の途中であり、自分の力で変えることが出来る国であるからと話していた。何かを変えたいという気持ちが海外で成功する秘訣であり、西垣氏自身もそのような気持ちを日々心に留めながら、尽力されていることがひしひしと伝わった。

SAGA国際法律事務所代表取締役兼弁護士を務められる堤雄史氏は、2015年3月に事務所をミャンマーで設立し、ミャンマー又はタイへ進出する日本企業を中心として、外国投資法、労働法等のミャンマー法又はタイ法に関する

各種アドバイス、契約書の作成等の業務に従事している。ミャンマーで朝市を散策した私たちは、多くの人々が朝早くから活動していることに驚いた。その発見に関し、堤氏はミャンマーでは法律上23時以降はお店を開くことが禁止されているという話をして下さった。普段からその原則が厳しいわけではないが、選挙前等は暴動を防ぐためにも警察の取り締まりが厳しくなるといい、散策時の驚きとミャンマー法律が結びつき、新たな発見が出来た。

福岡市からヤンゴン市開発委員会に技術職員として駐在中の野田勝也氏は、上下水、廃棄物処理等の分野における技術協力等に携わっているが、そもそも廃棄物処理に関して、道路の真ん中に捨てず溝に捨てれば問題がないというのがミャンマーの人々の意識だということ。それが大きな洪水をすぐに招いてしまう原因であるのに、災害が起こるのは前世の所為だと考える彼らは、インフラ整備の必要性に対して意識が十分に高くないため、技術提供以前にその意識改革が必要だそう。また、野田氏は、2016年12月から福岡市と姉妹都市になったため日本の技術提供に信頼を持って受け入れてもらえるよう、両都市で情報発信する場を設け、信頼関係の構築にも尽力されている。

このように私たちは、日本では知ることのできないミャンマーでのビジネス、そのおもしろさ、日常を過ごして初めて分かる国民性について学ぶことが出来、非常に貴重な経験となった。御三方は強い信念とミャンマーの発展に寄与することへの情熱であふれていた。その姿に私たちは感銘と刺激を受け、御三方から教えていただいた教訓を忘れず、団員それぞれの夢、活動に活かしていきたい。

(文責：野坂ゆい)



広大な大地に点在するバガンの遺跡群



黄金に輝くヤンゴンのパゴダでの集合写真



民族衣装ロンジーを着て美しい寺院と共に



ビジネスの面白さを語ってくださる西垣さん



国際法律事務所勤務されている堤さん



発展の歪さを話して下さる野田さん

ミャンマー／福岡県戦没者慰霊碑、マレーシアへ移動

11月8日(水)

「福岡県戦没者慰霊碑」へ献花。今回の訪問に際してお世話になった方へ感謝し、次の訪問地マレーシアへの期待を膨らませた。

ミャンマー最終日の朝、ヤンゴン市からバスで40分程度移動して私たちは、「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」を訪れた。今から70年以上前の太平洋戦争当時、日本が制圧していたビルマはイギリス、アメリカ、中国から攻撃を受けた。ビルマへは30万人以上の日本人が出征し半数以上の方が戦死した。そのうち福岡県出身の方も多く、およそ1万4千人の方がこの地で飢えと病に苦しみながら亡くなっている。慰霊碑がある敷地はしっかりと整備されていて、花も見栄えの良ように植えられていて毎日欠かさず手入れしてくれていることが分かりミャンマーの方々の真面目さ、優しさそして日本人との絆の深さを改めて感じた。そのミャンマーの方への感謝とともに亡くなった日本人の方々への想いを込めながら団員1人1人が焼香を行い、黙祷を捧げた。

その後、周辺のマーケットを視察しながらヤンゴン空港へ向かった我々は、ミャンマーでの研修期間中素晴らしい笑顔でガイドをしてくれたオンマーさんとお別れをした。

これまで「おもてなし」の心は日本人が一番だと思っていたが、オンマーさん含め現地ですれ違ったミャンマーの方々の「優しさ笑顔」に心を打たれ「おもてなし」の心という部分においては日本人より勝っているんじゃないかと感じた。

ミャンマー人は自分の幸せより人の幸せという風習が根付いていて、良い人ばかりでとても好きになれた。お別れに寂しい気持ちを皆感じながらマレーシアのクアラルンプールに向かった。

クアラルンプールに着くとまず感じたのが、日本より発展しているということだ。高層ビルが立ち並び、尚且つ自然もきちんと残してある、まるでリゾートという印象を強く受けた。夜ご飯を食べる場所、宿泊するホテルともにリゾート地にいるような気持ちになる場所で、興奮が収まらなかった。また明日から始まるクアラルンプールでの視察に胸を高ぶらせながら眠りについた。

(文責：横大路貴哉)



綺麗に整備されたヤンゴン日本人墓地



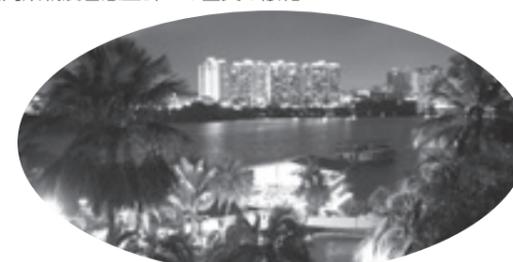
墓地周辺のマーケットの様子



福岡県戦没者慰霊碑への団員の献花



お世話になった通訳のオンマーさんを交えた集合写真



クアラルンプールの街並み

マレーシア / AM 華人系小学校訪問

11月9日(木)

華人系とマレー系、インド系など、多様な児童が通う「華人系」小学校を訪問。授業見学、教員の話を通して日本の教育と比較し、違いを理解する。

1. マレーシアの教育制度

マレーシアの教育制度は、初等教育6年間、中等教育5年間となっている。中等教育は、前期3年、後期2年に分けられ、後期は、日本で言う高校に近い。初等教育段階では、マレー語を主とするSK、中国語のSJK(C)、タミル語のSJK(T)の3つが設置されており、自ら使用している言語の教育を受ける必要はなく、選択は自由である。また、初等教育、中等教育3年の修了時に、全国統一試験が実施され、その結果により、進学先が決定される。

マレーシアには、義務教育の規定が無いが、公立学校ならば中等教育まで無償なので、初等教育の就学率は100%近い。

2. 華人系小学校訪問

今回訪れたのは、中国語を使用するSJK(C)で、1学年約290人、全校生徒数約1700人の学校である。学校に到着すると、教員、児童が迎えてくれた。写真撮影をした後に、団員を4人程で1つのチームとして分かれて、授業の見学をさせて頂いた。授業を見る前に、控え室として案内されたのは、図書室であり、英語と中国語の本が、同数程度置いてある。この学校では、高学年になると、英語、中国語、マレー語の本は、ほとんど読めるようだ。授業の見学では、中国語の勉強をしている所だった。そこで感じたのは、日本の小学校と比較すると、皆が積極的に発言していたとい

う事だ。食堂で児童と同じ食事を頂いた後、職員の方のお話があり、そこで様々なお話を聞いた。公立の学校だが、資金面は、政府からとPTAからの半々だと言う。これは教育面に、PTAからの要望が反映されやすい事に影響していると思う。また、学校の教材をインターネット上に公開することで、児童の自主的な学習を啓発しているそうだ。また、児童の中に華人系以外の人が多かったことを、なぜか聞いてみた。教員の人によると、中国の経済成長の裏には、忍耐力を鍛える中国の教育が背景にあると考えることや、これからは、国際的な競争力を養うためには、英語、中国語、マレー語など、3言語を使える事が必須だと考える親が多いという事だと言う。

3. 感想

学校の視察を終えて感じたことは、日本の学校に比べて、児童が非常に積極的に授業に参加していたと言う事だ。私が知っている学校が全てではないが、日本の学校は、授業に消極的であり、今回視察したマレーシアの小学校のように、もっと積極的に参加できるような授業を考えていく必要があると思った。また、英語教育においても、マレーシアと比較すると、遅れていると痛感し、日本では、これよりもっと実用的な授業制度や、学べる雰囲気作りをしていく必要があると思う。

(文責：山崎一輝)



小学校校舎



授業風景



児童に太鼓を披露してもらいました



ソーラン節

マレーシア/PM SPAD(陸上公共交通委員会)

11月9日(木)

マレーシアの公共交通機関を司る陸上公共交通委員会(SPAD:Suruhanjaya Pengangkutan Awam Darat)の取組と今後の展望

1. SPADとは

SPADとは2010年6月3日に正式に発足した陸上公共交通委員会(英語: Land Public Transport Commission)。日本で言うところの国土交通省に近い国家機関で、主に公共交通機関の規制・法律の整備及び監督を行っている。「ITO lead the transformation」というビジョンを掲げ、「利用者の安全性や利便性を追求するとともに、いかに効率的にまた継続的にヒトやモノを運ぶか」というミッションに対し様々な取組みを行っている。

2. マレーシアが抱える交通事情の課題

マレーシアでは数年前まで車社会であったことから特にクランバレー(首都のクアラルンプール市内近郊)ではひどい渋滞がたびたび発生していた。そして、SPADとしてはLRT(都市旅客鉄道)と呼ばれる無人運転鉄道やモノレールの建設、バスやタクシーの利用促進等により、その渋滞が緩和されると考えていた。しかしながら、依然渋滞は緩和されておらず、課題認識を持っている。

渋滞が緩和されない理由は主に二つ。一つ目は従前から車社会であったため車の保有台数が1家族当たり3台と過剰な状態であり公共交通機関の利用が進まないこと。二つ目は首都の中心部の地価上昇により都心部ほど交通網が整備されていない都心部近郊に住む人が通勤のため車を利用すること。

また近年では観光客を狙った悪徳タクシー増加も課題となっている。

3. 上記課題に対する取組み

「渋滞緩和のために高速道路や幹線道路の整備は行わないのか」と質問したところ、「反って車の利用者が増加する可能性があるため鉄道やバスの利用を促進している」と返答があった。実際に、鉄道関連であれば現在の6路線の全てで中

心部まで行くことができるように鉄道網の整備を行った。その結果、利用者数が74万人/日へ増加した。またバスでは都心部近郊にバス停を増やし、ルートを約300路線まで増加させた。また利用者が利用したいと思えるような工夫として時刻表の設置、運行状況の見える化等を行い利用者数が50万人/日と増加した。その他にもバリアフリーの充実、乗車券の代わりにICチップの導入を行っている。

また悪徳タクシー対策としてはチケット制(事前に目的地までのチケットを購入しタクシーに乗り込む)の導入、最近では若者のUber利用も課題解決の一助となっている。

4. SPADが考える今後の展望

観光産業が盛んな国であることから、観光客向けインフラを整えていく方針。鉄道はシンガポール、バスはロンドンをモデルケースとして最終的には利益が出るような産業としていきたい。そして何よりSPADが持つミッション「利用者の安全性や利便性を追求するとともに、いかに効率的にまた継続的にヒトやモノを運ぶか」を達成させることが今後の展望である。

5. 最後に

実際に私がマレーシアで感じたこととして、渋滞は多少なりとも発生していたが福岡でもよくあるような渋滞であり、特段不快感はなかった。その反面、ICチップやバスの時刻表の導入等については遅れていると感じ、まだまだ課題はあると思う。しかしながら、ミッションを達成させたいという熱意が強く感じられ、日本もそういった面から学ぶことがたくさんあるのではないかと改めさせられた。

ちなみに豆知識としてマレーシアでは男性は基本的に電車のイスに座らないようだ。私は何気なく座ったが周りを見渡せば座っているのは女性ばかりであった。

(文責：小池 恭兵)



SPADでの集合写真



記念品を贈呈する団員



説明頂いたSPAD職員



質問を投げかける団員



SPADのコントロールセンター

マレーシア / PM マレーシア政府観光局

11月9日(木)

マレーシア政府の観光施策について学び、日本・福岡の観光施策について考えた。

1. マレーシア政府観光局の概要

マレーシア政府観光局では、2020年までに先進国入りするというマレーシアの国家目標「ビジョン2020」に関連して、現在約3,000万人である外国人観光客数を2020年に3,600万人まで増やすという目標を掲げている。これは、日本の外国人観光客数(2016年：約2,400万人)よりも多い。この目標を達成するために、政府観光局では国毎に需要調査を行い、その国の旅行者の目的に応じたマーケティング・プロモーション活動を実施している。

2. 日本人観光客に対する取り組み

まず、日本人観光客の状況についてお話しいただいた。日本からマレーシアへの渡航者数は、2017年1月～8月までの合計数が約26万人で世界第8位であった。2014年から日本人渡航者数は年々減少しており、これはマレーシア航空機墜落事故やイスラム国等の問題が一因ではないかと考えているようだ。逆に、マレーシアから日本への渡航者数は、VISAが不要となったこと等により増加傾向にあるようだ。

次に、日本人向けのマーケティング・プロモーションについてお話しいただいた。政府観光局では、日本人のターゲットとして、旅行者全体に占める割合の多いSOL (Single Office Lady) というカテゴリーに重点をおいているようだ。SOLは日本だけに設定されたカテゴリーで、独身の女

性会社員を指す。彼女らに対して、例えば、インフルエンサーと呼ばれる購買者に影響力がある人々と連携して、SNS等のデジタルマーケティングを実施しているとのことだ。このようなターゲットとその施策は、国毎の特徴やニーズをもとに計画されており、政府観光局の戦略性の高さを感じた。また、単なるレジャー目的の旅行者だけでなく、教育旅行、ホームステイ等を目的とした比較的滞在が長い旅行者に対しても誘致をすすめ、旅行者の平均滞在期間を延長させたいという思いがあるようだ。

3. 感想

最も印象に残っていることは、「マレーシアの観光業として最も自慢するポイントは？」という質問に対して、「それはマレーシアに来てくれる国、人によって異なる。私達は相手が望むものを提供したい。」と言われたことだ。各種施策には、このような訪問者の思いや期待に応えたいという考えが根本に根付いており、マレーシアの「おもてなしの心」を窺い知れた。

2020年に東京オリンピックが控え、福岡県においても観光客数が増加するとともに、様々な国から観光客が来ることが予想される。その時に、外国人観光客と一括りにするのはなく、それぞれの国・地域の文化的背景やニーズに配慮したおもてなしが必要ではないかと感じた。

(文責：阿部竜弥)



様々な質問が飛び交う会議室



マレーシアの夕食交流会にて



マレーシア政府観光局の皆さんと

マレーシア / AM ハラル産業開発公社(Halal Industry Development Corporation)

11月10日(金)

イスラム教徒、彼らをビジネスターゲットにするために

ハラル産業開発公社(以下、HDC)のHDC TRAINING CENTREではハラルとハラル認証についての講義を受けた。HDC TRAINING CENTREには2020年の東京オリンピックでイスラム教の人に「日本食を安心して食べてもらいたい」とハラルについて学びに来る日本人もいるそうだ。

ハラルとはイスラムの教えで「許されている」という意味のアラビア語である。

イスラム教で禁じられている代表的なものは豚、アルコールである。これらはノンハラルといい、食品の中に少しでも入っていると食べることはできない。また血は不浄なものとされているので、牛、鶏も正しい手順で屠殺されたものでなければハラルと認められない。毒もノンハラルであるため、毒を持つフグはノンハラルとなる。しかし、資格を持つ人が調理をしたフグはハラルだと考えられ食べることができるそうだ。

このようにハラルについて多少知っていることはあったが、初めて聞くことが多かった。

その他にもハラルは食の面でのイメージが強いが医療や肌につける化粧品や、ブラシなどもハラル認証の対象になっている。アルコールはすべてダメというわけではなく、掃除や、医療などに使う分は許容範囲内という。それに対して豚は、原料としての使用だけでなくパッケージに豚のキャラクターを描くことも受け入れられないそうだ。

運搬の時もハラルとノンハラルのものを一緒に載せてはいけない。認証を受けるためには名前にも気を付けなけれ

ばならない。ビールはアルコールであるため、名称にビールと入っているだけでも認証されない。このように様々な厳しい制限がある。

しかしハラル認証は、イスラム教のハラルであることに加えて、製造工程のクオリティ、安全性が保障されていることの証にもなるため、イスラム教の以外の人も安心して食べることができる。そのためハラル認証取得にはビジネスチャンスが増えるというメリットがある。

しかし、認証を受ける前に、元の味を確認しておくことも大事である。観光客向けにするために味が変わってしまうと、地元の常連が来なくなることもあるため、その点では認証を得るべきかどうかを考える必要がある。

イスラム教徒の人は食品にハラルマークがなくても成分表示を見て食べるかどうか判断するが、安心して食べるにはハラルマークがあったほうがいいということ。そしてハラルマークの飲食店がないときはアラブ料理など中東の料理の店に行くなどイスラム教徒の人は食事に苦労することが多いそうだ。実際日本では、ハラルは身近ではないため、日本のイスラム教徒は苦労していると思われる。

2020年には東京オリンピックが開かれ、多くの外国人観光客が日本にやってくる。中にはもちろんイスラム教徒もいると考えられることから日本でもハラル商品の需要が増えるだろう。今後、ハラル認証を取得することがビジネスを大きく展開する鍵になるのではないかと。

(文責：堀口貴広)



最初のあいさつをする安村さん



真剣に講義を受ける団員達



講義中の様子



入口での記念写真

マレーシア / PM KEWPIE MALAYSIA SDN. BHD. (キューピー マレーシア)

11月10日(金)

草の根の活動が実を結び、さらなる挑戦を続けるKEWPIE MALAYSIA SDN. BHD.

食・フードビジネスチームでは、マレーシア内に工場を持ち、東アジア各地に向けて営業活動をしているKEWPIE MALAYSIA SDN. BHD. (以下、キューピーと略称)の井上様と宇都宮様にお話を伺った。

日本のキューピー・マヨネーズ販売85周年を迎えた2010年10月にマレーシアでのハラル認証取得を契機に設立した会社である。

キューピーがマレーシアに進出した理由としては、マレーシアの一人当たりの卵消費量が世界2位(日本は3位)であったため卵を多く使用するマヨネーズが受け入れられやすいと考えたこと、日本と食文化が近い、飛躍的な経済発展で食の洋風化が進んでいる、当時のマレーシア政府の政策により海外進出して黒字になるまで法人税がかからなかったことが挙げられる。今回キューピーの方が言われていたのが、海外進出するには事前準備をしっかりすることが重要ということだ。世界的に有名なキューピーでさえ進出する前に、すでにマレーシアに展開しているAEONにお願いし、自分たちの商品の知名度を上げるために実際に店頭で場所を借りてサンプリング活動を行った。

展開後は定期的なサンプリングの他に、月に1度の料理教室を開くなど地域に密着した活動を行っており、地道な努力とあきらめないことの大切さが身を結び、2015年より黒字経営となった。

今後はハラル認証を活かしてイスラム教徒の多いシンガポール、また人口が飛躍的に増加しているインドなどの受注拡大を狙っているとのこと。

その他、生活習慣病を多く抱えていて生野菜を食べる文

化がないマレーシアの企業、学校等を訪問し、定期的にサンプリングし生野菜を食べる文化を作りたいとも話されていた。

自社の利益追求だけでなく人々の健康生活向上に貢献するという所に惹かれた。

また、キューピーは従業員の福利厚生にも力を入れている。マレーシアでは日本に比べ、離職率が非常に高い。そこで、キューピーでは従業員に対して個別面談や社員同士のレクリエーションを行っている。これらのコミュニケーションを増やす施策を行うことで、離職率を格段に下げることができるそうだ。その他にも、工場には、従業員のモチベーションを上げるための仕掛けが多数ある事が説明されとても勉強になった。

私がキューピーから学んだことは大きく3つある。まずは前述した事前準備の大切さ。2つ目は迅速な行動力。キューピーはスタートダッシュが早かったため他社に先駆けて成功したとのこと。そして、3つ目は現地での土俵があるということである。どんなに良い商品があっても消費者に商品を知ってもらわないと売れない。キューピーがAEON内でサンプリングさせてもらったように現地で売るための土俵が大切であることを学んだ。

今後東京オリンピックなどで、日本においてもイスラム教徒の来日も増加し、「ハラル」という大きなキーワードを聞くことが多々出てくるだろう。こうしたチャンスを生かすことが企業を大きくする上でとても大切なことであり、キューピーのようにいつまでも挑戦し続けることが重要である。(文責：横大路貴哉)



キューピーマレーシアの説明をして下さる井上様



Q_Aセッションの様子



講義頂いた井上様、宇都宮様を交えた集合写真



貴重な講義ありがとうございました！

マレーシア / PM AEON Mid Valley Megamall

11月10日(金)

多民族国家マレーシアで飛躍し続けるイオン・マレーシアで、アジアや中東への進出の手がかりを学んだ

クアラルンプール最大、東南アジア最大級の広さを誇るショッピングセンターと呼ばれるMid Valley Megamallを訪れた。そこは豊富な食料品や日用品の他、ブランド品までも兼ね備えた、地元住民から観光客まで楽しめる場所だ。まずご対応いただいたAEON CO.(M) BHD.(イオン・マレーシア)のシニアマネージャー佐藤様からイオン・マレーシアの事業・実績についてのお話を伺い、その後モール内を見学させていただいた。

佐藤様はマレーシアに来られてから、イオンの企業理念である「お客様第一」をモットーに、従業員の教育に力を入れてきたのだとおっしゃっていた。佐藤様のお話の中で印象的だったのが、「今の時代、お客様に自分から売り込みに行かないと商品は売れない。」と何度もおっしゃっていたことだ。まず販売員の意識向上のために販売員に商品を売り歩かせ、大変さとともに自分から商品を売り込まなければいけないということを体感させたそうだ。

スーパー内を見学した際に売り場ごとに担当の販売員がおり、お客様に対し積極的な声かけや商品説明を行っていた。佐藤様がおっしゃっていたことが実践されていると実感できた。

Mid Valley Megamall内にはイオンビッグとイオンスーパーがあり、イオンスーパー内には、イオンの独自ブラン

ドであるトップバリュ製品は勿論、日本製品も充実していた。まるで日本のイオンスーパーにいるような心地がした。マレーシアは在留邦人数が年々増加し移住先としての人気が高まっているので、日本人に対しての戦略も重要だと思っ

た。イオンビッグ内にはムスリム以外に向けたノンハラルコーナーが設けられている。これが多民族国家マレーシアだということを感じさせた。イオン・マレーシアはマレーシアの人口の6割を占めるムスリムにいち早く対応してきた。ムスリムはお酒や豚がイスラム教によって禁止されているが、お酒や豚を好むイスラム教以外の宗教信仰者のための販売コーナーを設置していることがこの国で成功を収めてきた秘訣のようだ。

日本企業が今後の重要な市場となるアジアや中東のイスラム教国家に進出するためには、そうした配慮が求められる。

イオンモールはASEAN地域を一つの巨大マーケットと考え、「アジアシフト」という目標を掲げている。グループ企業一丸となってASEAN地域での更なる事業展開を加速させているのだ。社員教育、その国に合わせたビジネス戦略が海外で次々と成功を収めている理由だと分かった。

(文責：安村夏希)



ご説明いただいたAEON CO.(M) BHD.の佐藤様



日本と同じお客様提案ボード



Mid Valley Megamall内のイオンの入口



熱心に質問する団員



真剣に説明を聞く団員たち



品揃え豊富な店内

マレーシア／夜 夕食交流会

11月10日(金)

マレーシアで活躍されている方をお招きしての夕食会は大変有意義な時間であった

マレーシア最後の夜、在マレーシア福岡県人会やキューピーマレーシア、JTBマレーシア支店の方と、SPADやマレーシア政府観光局の方、現地の大学生をお招きして夕食交流会を行った。

夕食交流会は団長による開会挨拶と在マレーシア福岡県人会副会長の小山真一様の乾杯挨拶を皮切りに始まった。最初は緊張した面持ちの団員も多かったが、次第に緊張がほぐれ、各所から笑い声が聞こえるほどであった。

緊張が解けて

食事が進んだところで団員一人一人の自己紹介が始まった。現地で覚えたマレー語で自己紹介をした団員もいて、大いに盛り上がった。団員の小池さんが代表でウェルカム・スピーチを行い、来てくださった方々に感謝の気持ちを述べた。

その後も様々な方とお話し、交流した。英語が得意ではない団員も知っている単語や、ジェスチャーで物事を伝え、英語が堪能な団員と協力してコミュニケーションをとるなど、試行錯誤していた。それぞれ自身のこと、福岡のこと、マレーシアの感想などを話し、観光・インバウンドチームは数時間前に聞いた話をより深く理解するために、マレーシア政府観光局の方と質疑応答や意見交換を積極的に行っていた。

私自身も様々な分野で活躍されている方とお話することができた。一番印象に残っているのはマレーシア政府観光局の方と話したことだ。お二人は日本がとても好きで、かつて日本で旅行したという体験談を聞かせてくださった。そのお話は、私にとって日本文化や街の魅力を客観的な視点から考えるきっかけとなった。ほかにも自分がマレーシアで強く感じたクアラルンプールの急速な経済的、文化的発展について意見交換することもでき、とても有意義な時間となった。

名残惜しい最後

楽しい夕食交流会はあっという間に過ぎてしまい、最後は在マレーシア福岡県人会会長の藤木雅穂様による閉会のあいさつで幕を閉じた。

今回の夕食交流会では普段聞くことのできない話を伺うことができ、団員にとってとても貴重な経験となった。この交流会でグローバルに活躍される方々と出会って感じたこと、考えたことを心に留めておきたい。また、現地で出会った大学生とは別れ際に連絡先を交換し、今後も連絡を取り合うことを約束した。7日間の海外研修を締めくくるにふさわしい有意義な忘れられない夜であった。

(文責：原島真衣)



交流会集合写真



談笑するゲストと団員



小池さんによる団員代表挨拶

マレーシア／クアラルンプール市内・近郊視察そして福岡へ

11月11日(土)

発展途上国の人々の活気と技術の進歩、そこに展開する海外企業。それを目で見て体で感じ日本へと帰国した。

海外研修の日々もあっという間に過ぎ、最終日となった。早朝にホテルを出発して、まずは2011年に完成したばかりのマレーシア王国の王宮、ISTANA NEGARA (イスタナネガラ)へ。大きな門の両サイドには衛兵がおり、一緒に写真撮影をすることができたが、王宮内の情報流出を防ぐために話すことを禁じられていた。門の奥を覗くと、黄色いドーム型屋根の宮殿を正面から見ることができ、厳かな雰囲気を感じることができた。

次にバスで向かったのは、国立モスクだ。女性は館内に入る際にローブを着用することが義務づけられている。男性の場合は、膝が出ているパンツを履いている人のみローブを着なければならなかった。礼拝堂はメインプレイヤーホールと呼ばれており、ここは時間を問わずムスリム以外は入場できない。団員のほとんどが初めてモスクに入ることもあり、少し緊張しながらも異文化に触れることを楽しんでいった。

モスクから移動し、独立記念広場(ムルデカ スクエア)を視察した。ここは、1957年にイギリスからの独立を宣言した歴史的な場所で、植民地時代の名残を感じる建物に誰もが息を飲んだ。「I LOVE KL」と書かれた写真撮影スポットや、シティーギャラリーもあり、都市を身近に感じる場所でもあった。

昼食をとるため、KLタワー展望レストランAtmosphere360°へ。レストランでは中央にバイキングがあり、それを囲むように席が並べられていて、外側の席は少しずつ回転するので、その名の通り食事をとりながら外の景色を360°見ることができた。バイキングコーナーの隣で歌手の方が歌っていたが、よく聞いていると目の前に来たお客さんの母国の歌を披露しており、レストランに対する満足度を上げる

工夫がされていた。実際に私たちの前ではキロロの「未来へ」を披露し、私たち団員と合唱して大きな盛り上がりを見せた。

多くの人で賑わうセントラルマーケットの中では、ナマコ石鹸や、お菓子、衣類など様々なものが販売されていた。日本語で対応する従業員や日本語で書かれたPOPなどが多く見られ観光地として機能していると感じられた。

最後にKLCCで解散・集合し、テーマチーム別視察。与えられた時間内でそれぞれのチームごとにテーマに沿った視察先を決め、思い思いに見て回った。私たち観光チームは、電車でKLセントラルへと向かい、駅直結型のショッピングモールを視察した。ショッピングモールではいつでもムスリムの人たちが礼拝できるようにモスクが設置されていて様々な工夫が見られた。行き交う多くの人たちは、人種や言葉は違うが皆共通して笑顔だった。ショッピングモール内を歩く多くの人、立ち並ぶ様々な店を見て日本とは違ったエネルギーをひしひしと感じテーマ別研修の時間が終わった。残念ながら移動時間を含めると大型のショッピングモールの全体をくまなく見て回ることはできなかったが、私たち観光チームはとても有意義な時間を過ごすことができた。

現地で最後の夕食をとって空港へ。これまでミャンマーとマレーシアで過ごした日々を思い返し、寂しく思いながらも残りわずかな時間を仲間と過ごした。

最終日は観光地が多いように思ったが、現地での観光客に向けた工夫や、今まで知らなかった文化に触れ、多くを学んだ。福岡に帰国した私たち団員は、出発前よりも少なからず成長しているのではないと思う。

(文責：金高誠生)



国立モスク



ムルデカ・スクエア



ペトロナスツインタワー



KLタワー



展望レストランAtmosphere360°



賑わいをみせるCentral Market

第5次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
12月2日(土)、3日(日)

循環社会や地方創生、ヘイトスピーチについての知識を得て、海外研修での学びを整理しながら今後の計画を立てた。

研修初日はNPO循環生活研究所の理事長である、たいら由以様から段ボールコンポストや高校・大学と共同で行っている活動などについてご講話をいただいた。段ボールコンポストとは生ゴミを簡単に家庭で堆肥化できるものである。「たべもので人の存在は左右される」という考えをお持ちのたいら様は、半径2キロ以内でのコンポストを起点とした循環を目指して「Local food cycling」を行っている。この講話を聞いて、いまの私たちは自分が口にする食べ物の生産地に対して興味がないことが大きな問題になっていると考えた。また、これから都市化が進む中で、地域住民たちが持続可能な社会づくりを行うことは非常に大切なことであると感じた。

株式会社 BOOK代表取締役社長の大井忠賢様からは公民連携による持続的地域創生をテーマにご講話をいただいた。大井様は現在、地元である田川市を盛り上げるために廃校舎を活用した施設である「いいかねPalette」の運営を行っている。一度しかない人生を思いきり全うするためには自分を見つめ、なにがしたいかということを考えることが大切だということや、ご自身の活動について熱く語っていただいた。ご講話の中の「グローバル人材だからこそロー

カルなことができる」という言葉がとても印象に残っている。私たちが今回のプログラムで学んだ知識や経験を福岡県に還元できるよう、最後まで努力しなければと感じた。

北九州市立若松中央小学校民族学級講師の朴康秀様からはヘイトスピーチについてご講話をいただいた。テレビのニュースでよく耳にするヘイトスピーチは2009年頃から行われているもので、何の罪もない多くの在日コリアンが被害を受けているということがわかった。在日コリアンである朴様は、日韓友好のために韓国文化を日本人に体験してもらうイベントを開いている。マレーシアを訪問して民族の多様性について学んできたため、日本では多民族を排除しようとする人がいるということにショックを受けた。多文化共生の考えが広がる中、この問題は早急に解決する必要があると感じた。

2日目は第6次研修と報告会について計画を立てた。第1次研修から海外研修までで得た多くの学びを次回のフィールドワークに活かせるようにグループ全員で真剣に話し合うなかで団員間の絆が強くなっているのを感じた。

(文責：鳥嶋日菜子)



たいら様の講話の様子



大井様の講話の様子



朴様の講話の様子

講義名	講師
「小さな循環でいい暮らしをしよう」	たいら由以 NPO法人循環生活研究所 理事長 (第2回福岡県青年の翼OB)
「公民連携による持続的地域創生」	大井 忠賢 (株) BOOK 代表取締役社長
「ヘイトスピーチとは何か ～多文化共生社会の実現へ向けて」	朴 康秀 北九州市立若松中央小学校 民族学級講師



第6次研修について話し合う団員たち

副知事表敬

於：福岡県庁
2017年12月22日(金)

江口勝副知事を表敬訪問。今までの研修成果を報告。

12月22日金曜日、私たち研修生は、福岡県庁にて江口勝副知事へ国内でのフィールドワーク及び海外研修についての報告を行った。団員を代表して小池恭兵さんより挨拶をし、そのなかで、ミャンマーでのオイスカ研修所や、マレーシアでの華人系小学校等での人々との交流を行い、価値観や文化の違いを感じたこと。マレーシアの各機関や企業を訪問し、インフラや観光、ビジネスに対しての政策や活動が日本と大きな違いがあると感じたこと。その背景にはさまざまな歴史的な背景があり、宗教があり、色々な違いから生まれているのを感じたと報告した。そして、「私たち団員は、その違いや文化を受け入れ、理解し、国際的な視野を持ち、自身の活動の幅を広げていきたい」と決意を表明した。

江口副知事からは、「今回の貴重な体験を今後の成長に繋げてほしい。また、研修生同士の出会いも貴重なもので、その繋がりをこれからも大切にしてほしい。」とのメッセージをいただいた。

その後、団員一人一人が、海外で経験したこと、今後の日本に必要なもの等、自分たちが感じたことを話す中で、マレーシアと日本の英語力の差について触れた。私たちがマレーシアで訪問した華人系の小学校では英語教育が進んでおり、生徒や先生、その他スタッフ全員が英語のみを話す日があるほどだった。その他にも中国語やマレー語の授業もあり、多言語教育は日本と大きな差を感じた。今後の日本には多言語教育が必要なものの一つだろうとの意見を述べた。

江口副知事との意見交換を行い、改めて今回の研修で感じた事を再認識し、団員各々に新たな決意が芽生えたと感じた。国内研修及び海外研修にて私たちの考えは大きく変わり、成長したと思う。その成長を今後の社会活動に活かし、地域で活躍できるグローバルな人間になると強く決意した。

(文責：濱砂悠)



小池恭兵さんによる団員挨拶



江口副知事による激励の挨拶



集合写真

**第6次研修
(フィールドワーク)**

於：北九州市立藍島小学校
2018年1月18日(木)

人材育成・
教育チーム

**言語の習得は異文化を知り、
世界との距離を身近なものにする**

人材育成・教育チームでは、国際教育について理解を深めてきた。これまで「国際教育＝英語」という認識が強かったが、海外研修を通して、英語のみならず、その国で必要とされる多言語の習得はもちろん、世界を軸に、未来を見据えた教育を展開している現場を目の当たりにした。また、実際に海外を訪れ、その教育現場に触れて感じたことは、言葉や文化、宗教を超え、多民族が暮らす社会において、相手を理解する上で最も大切なことは、目の前のことに興味・関心を持ち、知ろうとする姿勢にある。2次研修で訪問した県内2つの小学校でも、積極的に授業に参加する子ども達の姿勢の違いを感じる部分があった。小学校に限らず、中高、大学でも、日本の学校は受け身の授業が多い。私たちは、この研修全てを通して、自ら関わりを持ち、臨んだことにより、自分にとって身近なものの存在を、世界においても感じる事ができた。積極的に参加できる授業を行うことで、学びがより自分のものとなり、身近になる。そこで私たちはこれまでの研修の総括として、子ども達が自発性を持って参加できるワークショップを行いたいと考えた。英語はもちろん、世界の教育現場が多言語習得にも熱心なのは、マレーシアのように、暮らしの身近なところで異文化と接する機会が多いことにある。多くの外国人が日本を訪れるようになり、日本の英語教育の早期学習が叫ばれる一方で、子ども達が身近な場所でその必要性を感じる機会は少ない。私たちは研修の総括となるこの最後の6次研修において、英語を使ったワークショップを通して、まずは海外に興味を持ってもらえるような授業を行うことにした。その中でも、チームとして限られた人数で、生徒一人一人と接したいという思いから、北九州市立藍島小学校で授業をさせていただけることになった。

そこで私たちは、島の子供も達が世界との距離の近さを意識する体験として、海外研修で訪問したマレーシアの華人系小学校へ、英語で手紙を書くという授業を提案した。手紙を書くのに使うポストカードやシールなど、買い物のワークショップのやり取りも、簡単な英語の挨拶や会話にチャレンジしてもらった。最初は、紙に書かれた英語を読みながらでぎこちなかったが、団員のサポートや、子ども達同士で協力し合い、意欲的に英語を使ってみようという姿勢が徐々に見られた。高学年の生徒には、例に挙げていない英語で問い掛けを試みると、頭をひねらせ、懸命に考える様子もうかがえた。英語が通じて嬉しいという気持ちと、伝わらないときのもどかしさとを同時に体験してもらった。最後に、藍島小学校の1年生から6年生の生徒全員に、マレーシアの華人系小学校へ英語で手紙を書いてもらった。外国人といっても、同じ小学生であるため、友達に手紙を書くような気軽なものとした。海の向こうにいる同世代の存在を、身近に感じるきっかけとなったように思う。手紙は団員が責任を持って、マレーシアの小学校に郵送した。

国際教育は、英語を駆使する人材の育成だけを指すのではなく、多様な人々を受け入れ、共に育むことのできる「心」を養うことにある。そのためには、様々な体験を通して、世界を身近に感じてもらうことが大切である。自分とは異なる人々の存在、異文化への興味・関心につながるような、多くのきっかけを積み重ねていくことが多文化共生への理解を深めていくように思う。本研修で、知識・経験ともを得た私たちは、青年リーダーとしての自覚と使命を持ち、今後もこのような場づくりを担っていく責務を認識した。

(文責：田中愛)



マレーシアのお友達にお手紙



英語でお買い物



皆で給食



ありがとうございました！

**第6次研修
(フィールドワーク)**

於：糸島市
2018年1月20日(土)

観光・インバウンド
チーム

**マレーシアで学んだ「EDUTOURISM」を実施することで、
新しい観光プロモーションについて考えた。**

私たち観光・インバウンドチームは、海外研修でマレーシア政府観光局を訪れた際、マレーシアで行っている観光プロモーション活動について学んだ。マレーシアでは外国人観光客のために多種多様なコンテンツを用意しており、その1つ1つにおいて、ターゲットを定め、そのターゲットが求めるニーズに沿って異なるプログラムを準備している。その中の1つとして、私たちは「EDUTOURISM」に着目した。「EDUTOURISM」とは、参加者がグループで現地に旅行し、教育や視察、文化交流などの学びのコンテンツを現地で学習する、というものである。第3次研修で講義を行ってくださったアルド・プロイゼ様のお話でも、外国人観光客が日本に来て、田舎で農業体験をするという新しい観光の形があることをお聞きしていた。実際、この観光プログラムは評判を呼んでいるらしく、このように日本に対しての観光へのニーズは多様化している。しかし、まだ受け入れ態勢が万全ではないのが現実だ。そこで私たちは自らこの「EDUTOURISM」を企画、実行することで、農家の方と外国人との交流の場を作り、農家の方にこの観光方法を身近に感じてもらうことを目的とした。

私たちの提案を快く受けてくださったのは、福岡のハンドボールチームとして活躍する一方で、糸島で農業に従事されている「フレッサ福岡」の方々だ。この企画を実施するにあたって興味を持ってくれた福岡女子大学の留学生4人に参加してもらった。「フレッサ福岡」の方々と共に私たちはミニトマトの手入れと、イチゴの収穫作業を体験した。

留学生たちは初めての農業体験をとて楽しんでくれていた様子だった。参加してくれた留学生全員が「また来たい！」と言ってくれ、今回の企画に満足してくれている様子が見て取れた。

しかし今回の企画によって問題点も見えてきた。まず1つ目は、移動手段の問題だ。農業は多くの場合、都心部から離れた場所で行われており、アクセスが悪い。農家の受け入れ態勢が整っていたとしても、外国人観光客だけでそこまでどり着くのはなかなか難しく、仲介に入り、サポートする必要があるのでは、と思われた。2つ目は、やはり語学の問題である。今回は参加してくれた留学生が、ある程度日本語を理解できるレベルにあったため問題はなかったが、一般の観光客ではこううまくいかないだろう。

実際に自分たちで企画、実行することで、様々な発見があった。何より、留学生と農家の両方において「EDUTOURISM」の需要があると知れたことが、この企画における大きな収穫だった。今後、日本はこのような新しい観光プロモーション活動を積極的に行っていく必要がある。外国人観光客のニーズは徐々に変化しており、日本はそれに対する柔軟な対応を求められているのである。そのためには1つ1つの問題に向き合い、丁寧に解決していくことが大切である。そして私たち自身も、更なる日本の観光業発展のため、今回の学びを積極的に発信し、貢献していきたいと思った。

(文責：樽林万葉)



「フレッサ福岡」の方との打ち合わせ



フレッサの選手にコツを聞く留学生



イチゴの収穫を楽しむ留学生



全員で集合写真。ありがとうございました！

**第6次研修
(フィールドワーク)**

於：九州産業大学
2018年2月2日(金)

食・フード
ビジネスチーム

ワークショップを通じ大学生に海外ビジネスについて興味を持ってもらい、自分達にも新たな発見を

私たち食・フードビジネスチームは第2次研修で訪問した石橋工業株式会社様、海外研修で訪問したキューピーマレーシア様から学んだ日本の食に関する現状や各企業で行われている海外展開のノウハウを、将来のビジネスを担う学生たちにアウトプットし、海外、特に東南アジアへの海外進出に興味を持ってもらいたいと考え、実際に第6次産業やエリアマーケティングを行っている九州産業大farm3.0さんと交流を兼ねたワークショップを開催した。さらに、新たな学びを深めるために、ゲスト講師としてJETRO福岡から中小企業の海外展開に詳しい吉田明弘様と南場一輝様にお越しいただいた。

当日はお互いの活動紹介や自己紹介を行った後、団員がこれまでの研修を通して学んだ「食文化・食ビジネス」についてのプレゼンを行った。参加していたfarm3.0の大学生は「ミャンマー、マレーシアでは、脂っこい食文化から生活習慣病の人が多い」、「生野菜を食べる文化がない」など今まで知らなかった東南アジアの食生活の現実に興味津々だった。

続けて、団員と学生が混合した3グループに分かれてワークを行った。各チームはミャンマー、マレーシアへの海外展開を想定し販売戦略を考え、発表した。発表ではマレーシアの健康ブームに目を付けた意見や、ミャンマーの食文化に基づいた意見が出ていた。互いのアイデアを共有することで、それぞれ新しい発見ができたのではないと思う。発表を終えた後の講師からの講評では「どのチームも面白い話し合いができており、それぞれの国の特徴をつかんでいる」という言葉に、参加者も笑みをこぼしていた。

ひと段落ついたら講師の吉田様に海外の現状や貿易のプロセスについての講話をしていただいた。講話の中で触れた、「文化が異なる場所でビジネスを展開していくと、思わぬ場所にビジネスチャンスが生まれる」という話が印象的

であった。そして、輸出の流れや輸出成功の要素を知ることができ、私たちが第2次研修で訪問した石橋工業株式会社様でお伺いした麦ごはんを健康食の提案として海外展開しているという話とリンクすることができ、フードビジネスの知識を深めることができた。

楽しい学びの時間はあっという間に過ぎ、閉会となった。最後に回収したアンケートによると、参加したうちの9割の学生が海外進出に興味を持ったと回答し、ワークショップの満足度は大変高い結果になった。感想欄には「今回学んだことをきっかけに海外についても視野に入れていきたい」「またこのような機会を設けて欲しい」といった意見が多く見受けられた。また団員からは「大学生と一緒に参加することで多角面からの視点でワークを進めることができたと思う」「自分の理解をさらに深めることができた」という意見が上がった。

我々は、これまでの食・フードビジネスに関する研修を通じて石橋工業株式会社様の麦製品のような「商品の独自性」、石橋工業株式会社様が取得したFSSC22000やキューピーマレーシア様が取得したハラール認証を含めた「海外進出に向けた認証取得」、健康ブームに目を付けた「マーケティング(=市場性を捉える力)」など、日本の企業が海外にフードビジネスを展開するうえで重要にしていることを学んだ。この半年間での学びを日々発展しているグローバルな社会に活かしていき、食の分野にかかわらずあらゆる分野において問題解決に果敢に挑む姿勢を大切にしたい。

最後になりますが、ご多忙の中、準備のアドバイスから当日の講話までご協力頂いたジェトロ福岡の吉田明弘様、南場一輝様に深く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。(文責：平ひかり)



- | | | |
|--|---|---|
| <p>1 班</p> <ul style="list-style-type: none"> 安部かりん 阿部 竜弥 伊藤 大将 片山 歩美 金高 誠生 末永 瑞穂 高橋和佳子 田中 愛 | <p>2 班</p> <ul style="list-style-type: none"> 樽林 万葉 小池 恭兵 平 ひかり 野坂 ゆい 原島 真衣 福田 小夏 藤原 奈々 山崎 一輝 | <p>3 班</p> <ul style="list-style-type: none"> 興梠 汐音 鳥嶋日菜子 濱砂 悠 堀口 貴広 村上 瑞麗 安村 夏希 横大路貴哉 |
|--|---|---|



グループワークを行う様子



海外研修での学びを発表する団員



吉田様からの講話



グループワークを行った全員で集合写真





価値観と尊重

安部 かりん

北九州市立大学 文学部 比較文化学科



私は大学1年生の頃にカンボジアに行きました。発展途上国ってどんなところなんだろう。そんな軽い気持ちで訪れたのですが、そこには私が想像していたものを遥かに超える景色がありました。翌年、ベトナムに行った時はきっと東南アジアだから、カンボジアと同じような環境なのだろうと思っていたが、高いビルがそびえ立ち、高級ブランドの看板がたくさんあり、その差や発展具合に驚きました。隣国なのに食文化も全く異なっていて、日本が島国であることを思い知らされたとともに、自分がいかに色眼鏡でものごとを見ているか、世界はもっと広いということも痛感しました。その後、私は発展途上国(アジア)の進化・可能性にとっても惹かれ、大学のうちにもっと色んな国に行って、自分の目で見てみたい、自分の色眼鏡を壊したいという気持ちを強く持つようになりました。そんな時にこのプログラムを見つけました。結論から言うと、本当に参加して良かったです。やはりミャンマーとマレーシアは全く異なる国でしたし、その差にとっても驚きました。差とは経済格差のことだけではありません。ミャンマーでは稲刈りや水シャワーを浴びたこと、現地の朝市やマーケットの風景、ロンジーを巻いて寺院を訪れたこと、様々な民族が混在

していること、マレーシアでは超近代的な建物の数々、交通渋滞が問題となっていること、様々な宗教、人種が互いを尊重し合い生きていること、日本企業の進出具合やその工夫など、それぞれの国にはそれぞれ国の文化があり、価値観があることを改めて思い知らされました。何より出会った現地の日本人や現地の方々が皆、ミャンマーやマレーシアに誇りを持って話していたことを、とても鮮明に覚えています。私は来年の夏から7ヶ月、インドネシアに行きます。インドネシアは日本と同じ島嶼国であり、9割がイスラム教だと言います。私は将来、様々なバックグラウンドを持つ人々が何も悩むことなく交流し、お互いの価値観を尊重できるような世界を願うとともに、私自身、その架け橋になれるような行動ができればと思っています。その為にも今回学んだ多くのことを是非インドネシアに持っていき、比較し、世界はもっと広いということを発信できればと思います。福岡はアジアの玄関口です。もっともっと日本の文化や価値観を世界に広めると共に、多くの人々がより豊かな価値観を持てるような国へ発展していく懸け橋になって欲しいと心から願っています。これからももっと自分の色眼鏡を壊せるよう、残りの学生生活を過ごそうと思います。最後に今回、お世話になった多くの方々に感謝を伝えます。本当にありがとうございました。



世界の広さと多様性を知る

阿部 竜弥

西日本鉄道株式会社 住宅事業本部



私の勤める西日本鉄道では、中核エリアである福岡において「交通」、「まちづくり」等のビジネスを深化させ、そこで培ったノウハウを活かし、成長するアジア圏においてグローバルビジネスの拡大を目指しています。私はアジアの市場をこの肌で感じ、福岡を基盤とする企業の一員として、どのように関わることができるかを考えたいと思い、「福岡県グローバル青年の翼」に応募しました。

研修が始まる前にミャンマー、マレーシアについて勉強しましたが、インターネットで得られる表面的な情報で、両国の実体を捉えきれないという感覚がありました。しかし、研修が始まり、講師の方々からミャンマーの産業、オイスカ研修センターやマレーシアの人種・宗教・文化に関する講義を聞くにつれて、知識が深まり、漠然としていた両国の輪郭が段々とはっきりしていくのを感じました。その後の海外研修において、現地でも体験できないことを肌で感じ、当初の想像をはるかに超え、貴重な体験ができました。

ミャンマーでは、今後の経済発展の可能性を感じました。都心部はマンションやビルが立ち並ぶものの、都心から離れると道路が舗装されていない等インフラが整備されておらず、村では木材を組み上げた家で質素な暮らしをしている所が見られました。これから経済発展を遂げるにあたり、福岡の企業のノウハウで貢献できることがたくさんあると思いました。ただ驚いたことに、そのような生活であっても、出

会った方々は、優しく心穏やかで、それでいて満ち足りているような印象を受けました。これは、ミャンマーの主要な宗教である上座仏教の、現世で善行を積むことで来世の幸せを願う教えに影響を受けた価値観であるとのことでした。この価値観は多くの日本人の価値観とは違ったものであり、ミャンマーの方々にとって、経済発展がはたして本当の幸せに繋がるのだろうかという疑問が湧いてきました。私は国際的な視野を持つとは、このような違いを理解し、双方にとってより良い関係を築いていくことではないかと感じました。

マレーシアのクアラルンプールでは、現地進出している日系企業の方々から事業の面白さと難しさを学ぶことができました。中でも、キューピー株式会社様の「マレーシアに生野菜を食べる文化を定着させたい」という思いには感銘を受けました。単なる商品の販売だけではなく、生活様式の変革を目指しており、海外で働くやりがいの大ささを感じました。また、工場では日本式の作業等の見える化を進めている一方で、イスラム教徒の方々用にお祈り場を準備する等現地の文化に合わせた取り組みも行っていました。福岡の企業が海外に進出した時も、現地の方々に受け入れてもらうために、文化や価値観を理解し、相手の気持ちに寄り添った企業活動が必要であると感じました。

今回の研修は期待以上に充実して、多くの収穫を得ることができました。今後は自分だけの経験とせず、周囲の人々に発信し、日本・福岡県の発展に貢献できるよう尽力していきたいと思っています。



福岡とアジア諸国を結ぶ人材に

伊藤 大将

北九州市立大学 外国語学部 英米学科



“北九州市が持つ環境技術・ノウハウを途上国に輸出し、持続可能な社会の実現、ひいてはアジアに置ける北九州市のプレゼンスの向上、本市のさらなる成長に貢献したい”という思いから北九州市役所を就職先を選びました。今回のグローバルの翼では、アジア最後のフロンティアと言われているミャンマーと発展著しいマレーシアへの訪問と研修であり、私にとって大変関心のあるプログラムでした。ミャンマー・マレーシアが抱える環境問題を実際に目で見て体感し、どのような北九州市の環境技術・ノウハウが活かすことが出来るのかを知り、来年からの職務に活かしたいという思いから参加を決意しました。

事前研修ではミャンマー・マレーシアの情勢のみならず、福岡県が抱える問題や魅力を学び非常に有意義な時間でした。また様々なバックグラウンドを持つ学生や社会人の方々との共同作業や意見交換は個人的に非常に刺激を受けました。

過去にインターンシップでバングラデシュに滞在していたということもあり、ミャンマーのインフラ整備は同国とほぼ同じであるように感じました。ミャンマーはバングラデシュ同様には非常に若者が多い国であるということを感じました。話を聞けばミャンマーの人口は2030年までに6000万

人を超えるとのことで、ポテンシャルの高さを改めて実感しました。

日本人駐在員を招いたヤングンタ食会では、ミャンマーにおける日本のプレゼンスは中国や韓国に比べて低いということ、ビジネス環境の整備はまだまだであるという話を聞きました。

マレーシア研修では、厳しい国際ビジネスの最前線でご活躍されている多くの日本人駐在員にお会いすることができました。特にマレーシアキューピーの自社の利益だけでなく、人々の健康的な生活の実現をミッションとして取り組んでいるという話は非常に印象的でした。

クアラルンプールは想像以上にインフラが整備されており、その住みやすさには驚きました。そのため外国人観光客や留学生の数は多く、今後福岡県が国内外から観光客を誘致するために参考にすべき点は多々あるように感じました。

今回のプログラムに参加した目的である現地国の環境問題の発見、把握については滞在期間が短期であったこと、訪問先が限られていたこともあり、結果的に満足するまでには至らなかったと考えます。しかし、両国の今後ますますの経済発展を実感し、それに伴う環境汚染も予測されます。

このプログラムを通じて得た知識や経験を必ず来年からの職務に活かしていきたいと思っています。



新しい価値観との出会い

片山 歩美

北九州市立大学 外国語学部 国際関係学科



私は、大学で東南アジアや貧困について学んでいる。そのため、日本と距離も近く関係も深い東南アジアについて興味を持っていた。何人かの友達が東南アジアのスタディーツアーに参加し、その現地の衝撃的な体験談を聞いているうちに、私も講義や普段の旅行では見聞きすることのできない現地の生活を直に感じたいと思うようになった。そんな時に、この「福岡県グローバル青年の翼」について知った。ちょうど大学でミャンマーについて学んでいる最中であり、又、事前事後研修もあることからより深く東南アジアについて学べるのではと思い、応募した。

第一次研修から第三次研修では、ミャンマー・マレーシアの基本的な情報、そして福岡の企業や現状についてのお話を聞くことができました。ミャンマー・マレーシアのことについて初めて知ることも多く興味深かったが、それと同じくらい福岡のことについて初めて知ることが多く、いかに自分が無知であったかを痛感した。特に豊島茂様の観光業のお話は、海外ばかりに目を向けていた自分に、地元の魅力について考えさせられるいい機会であった。

海外研修では、同じ東南アジアであるにもかかわらず、ここまで街並みが異なることに驚かされた。ミャンマーは、経済都市でも計画停電を行わなければならないほど電力が足り

ておらず、地方では道路が整備されていない箇所もあり、インフラ整備がまだまだ追いついていない。けれどマレーシアは、高層ビルが立ち並び、高速道路が発達して立体交差も多く、夜は街が光で溢れていた。ASEAN内でもかなりの格差があること実感させられた。

ヤングンでの、現地で活躍されている日本人の方との夕食交流会の時のミャンマーの国民性についての話が印象的だった。民族も宗教も関係なく、ミャンマー人は何か悪いこと、命にかかわることが起こっても、ついていかなかったと考えるらしい。民族も宗教も関係なく、この考え方に染められる。日本とは異なる考え方・国民性に目に見えない国境を感じ、なぜそのような考え方にいたるのか興味を惹かれた。

クアラルンプールでは、マレーシア政府観光局の観光資源のお話が興味深かった。日本にはない政府が推進しているプロジェクトもあった。もし日本にホームステイのプログラムがあったならば、私の住む市はどのような体験を提供するか。考えるだけでわくわくした。

今までの研修を通して、急激に成長している東南アジアについて深く学ぶことができ、また改めて今まで気づかなかった福岡や地元の可能性について知ることができた。これをきっかけにさらに知識を深め、福岡に貢献できる人材になりたい。



初めての海外進出

金高 誠生

川崎町役場 住宅課 住宅管理係



グローバル青年の翼の研修が私にとって初めての海外だった。もともと海外には興味があったが行く機会がなく、職場の係長に勧められて応募したのが始まりだった。私が勤めている川崎町は人口1万7千人と少しの小さな町で少子高齢化や人口減少が進み、福岡県内でも消滅可能性都市として鞍手町に次いで2位にランキングされている。私は行政職員として海外研修に臨むに当たって、地域活性につながる改善策を見いだすという目的を持ち研修に臨んだ。

その海外研修は、ミャンマーのオイスカ・ミャンマー農林業研修センター訪問で始まった。初日の研修センターでの現地青年との交流会。団員が班に分かれて行った参加型のゲームが大盛り上がりを見せた。さらに、たくさんの現地料理や飲み物も用意されており、とても楽しい交流会となった。その中でもミャンマービールは飲みやすく、ほかの団員からもかなりの好評価。そこで、私は地元の川崎町でも異なる食文化の人たちにも受け入れてもらうことができる地元の特産品を開発したら良いのではないかと考えた。ミャンマービールは「アジアで最もおいしいビール」として世界でも評価されており、様々なネット通販で購入することができることから需要が高く多くの人に飲まれているそうだ。川崎町にもこれだけの人気商品があれば雇用の増加とそれに伴う人口増加が期待できる。川崎町が抱える問題を早期改善するためにもこの

ようなヒント早速掴んだ。また、研修センターでの稲刈り体験では、日本の祖父の田んぼで行った機械での稲刈りとは違い、鎌を使った手作業での稲刈りをおこない、とても貴重な新鮮な体験であり思い出深いものとなった。

2か国目のマレーシアでもそれぞれの訪問先で興味深い話を聞き、夕食交流会では現地の大学生や現地で働いている日本人の方々と交流した。しかし、どの場面でも英語を話す機会が十分なコミュニケーションを取らず、自分の語学力の限界に悔しい思いをした。

そんな海外研修も最終日には、王宮や国立モスク、ムルデカ・スクエアという独立広場に行き、日本では感じられない独特な雰囲気の中、団員の皆もクアラルンプール市内を思い思いに見回り、KLタワーの展望台で食べた昼食は360°見渡せる絶景で一生忘れることのできない楽しい思い出とさせてくれた。

そして帰国後の今、私はこれからもっと多くの国の人たちと交流がしたいと考え、空いた時間を活用して英語の勉強に取り組んでいる。今後は、一人で海外に行っても通用するだけの語学力を身につけたいと新たな目標を見つけることができる海外研修でもあった。

最後になりますが、このような貴重な機会を設けてくださった福岡県の方々や講師の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



溢れるエネルギー

末永 瑞穂

福岡大学 人文学部 ドイツ語学科



現在私は、大学のドイツ語学科で、ドイツ語やヨーロッパ文化について学んでいます。日本とヨーロッパの比較などを行っているうちに、日本と地理的にも経済的にも密接に関係している、東南アジア諸国の情勢を見て感じたいと考えようになりました。そこで「福岡県グローバル青年の翼」に応募しました。

国内研修では、教授や現在東南アジアで活躍している企業の方に講義をして頂きました。ミャンマーやマレーシアについて無知であった私には1時間1時間が大変勉強になることばかりでした。勉強をしたことを実際に確かめてみたいと思う気持ちが強くなり、海外研修への期待が高まりました。また、年齢も立場も異なるメンバーと時間を共にし、学ぶことで、多角的多面的に物事を捉える力を海外研修前に身につけることができました。

7月8日の海外研修では、毎日が刺激的でした。ミャンマーでは、ヤンゴンとエサジョを訪れました。到着日の夜ご飯、私にとって初めての海外での食事でした。それは独特の味付けで、海外に来たことを実感しました。ヤンゴンは、インフラや発展、貧困、教育など多くの問題を抱えており課題は多いように感じました。しかし、町は活気、活力で溢れており、

この国の可能性は未知数であるなど実感しました。エサジョでは、オイスカ・ミャンマー農林研修センターを訪問しました。日本人がミャンマーの農業技術を向上させようと奮闘している姿を目にしました。技術だけでなく、ミャンマーの土壌環境や消費者の健康にも配慮しており、オイスカは現地の人々に受け入れられ、愛されていると感じました。ミャンマー最終日に、福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑に献花をさせて頂きました。ここに訪れたことで、平和への尊さに改めて気づくことが出来ました。海外研修4日目からは、マレーシアのクアラルンプールに滞在しました。ミャンマーとは大きく異なり、メガモールや高層ビル、インフラも整っており、日本人の移住先として選ばれている理由がわかりました。多民族国家なだけあり、食文化も多様でした。スーパーなどではイスラム教徒の為のハラール食品ばかりで、ハラールの市場の需用の大きさを実感し、これから日本企業のハラール市場進出への可能性はおおいにあると思いました。

異文化を体験したことで、先入観や価値観を見直すことが出来たと共に、異文化を吸収し理解することが出来ました。

今回、勉強させて頂いたことを社会に還元できるように、これからの大学生活で、考えや知識を深めていこうと思いました。



パンドラのアジア

高橋 和佳子

九州産業大学 国際文化学部 国際文化学科



ヤンゴンの広がる緑にそびえたつ遺跡群、幾何学模様がきらめくモスク、朝日の活気づいた朝市、空に向かってそびえる銀色のビル群。印象的な情景が今も脳裏に残っている。この二つの国の間で私の価値観は揺れ動いた。現在の発展が物語るように、ミャンマーとマレーシアはたどってきた歴史も違えば、文化形成における他国の影響の大小も異なることは言うまでもない。しかしながら、21世紀という時代にこの2か国は同じベクトルをもっていることも感じた。

私の揺れ動く「貧富」の概念の裏には、二つの出来事があった。ミャンマーのパガンで市場を周遊した時のことである。小さい子を背中に抱えた母親が緑色のプラスチックコップを私たち集団に差し出した。彼女の視線は澁んでいるが鋭く、無言の言葉を浴びている様な感覚に陥った。日本にも物乞いと呼ばれる人はいるし、海外では決して珍しいことではない。しかし、私がうろたえたのには、その後ろで、風貌がまるで変わらない女性が高笑いを響かせていたことがあったのではないかと思う。おそらく、貧しさや生活の水準は大差ないのかもしれないがその二人の姿が映し出したのは「幸福」

だった。自然と無理せず共存し、私の中の、先進した日本、物的に満たされている日本で生まれ育ったゆえに、恣意的に組み込まれた幸福の尺度が適用しない状況が目前にあった。貧しいから不幸せなのか。裕福だから幸せなのか。そのような問いかけが脳内をめぐっていた。政府系機関での視察や教育現場への視察を媒介し、マレーシア政府が推し進める国策の生活反映をみたとき、その虚無であった問いかけは確固たる疑問へと転じた。政治や国際団体が目指すは世界標準で、国民の目指すものももっと些細な生活の一場面に向けられるミャンマーと遥か世界標準の越境を見据える一部の経済層に属するマレーシア国民という構図が興味深い。これから街づくりなど環境を構築、生活を演出する過程ではこういった、ヒエラルキー内のアッパーとボトムの訴求価値のギャップに目を向けるべきなのではないかと考えられた。

さて、このような学び、新たな考え方を浴び吸収できたのは、疑いようもなく団員の支えがあったからだ。感じたことを互いで共有し、苦しいことは吐出し合い、笑顔で交わした言葉は忘れられないものになると確信している。これまでの時間は、立場、価値観、経験もすべて違いますが、23人の仲間と探検のようなものだったと幸せに感じている。



国際社会で生きる力

田中 愛

学校法人福岡女学院 法人本部 広報・校友課



私は東南アジアの2つの発展途上国を通して、その息吹と原動力を感じ取り、社会人と学生の世代の異なる視点で意見を交わしながら、これからの日本および福岡の環境について共に考えてみたいと思ひ、本研修に応募した。

テーマ別で臨んだ人材育成・教育チームでは、国際教育について考えた。県内の私立と公立の小学校視察を通して、異文化を身近に感じる環境こそが、国際教育に取り組む上で重要な要素だと学んだ。

海外視察先のミャンマーでは、厳しい環境の中、農業に取り組む若い研修生たちと生活を共にした。彼らは、家族、故郷のため、何より生きるために必死で農業を学んでいる。それにも関わらず、私たちを温かくもてなし、質問をすると手をとめ、いつも笑顔で応えてくれた。皆、「学んだ農業を故郷に伝え、故郷を引き継いでいく」という確固たる目的を持っている。自分が何のために学ぶのか、その目的を心に強く持つことで、いつ、どのような状況においても、目の前の相手を大切にできることにつながると感じた。

多様な人々が暮らすマレーシアでは、「グローバル」という言葉が存在しないことを知った。それぞれの民族で宗教や文化が異なることを理解し、お互いを認め、良いところを取り入れるという姿勢が、国の発展に大きく寄与していた。海外を訪れ、現地の方との触れ合いを通して、確固たる目的、揺

ぎない精神が、国際社会での生きる力になると感じた。こうした現地での学び以外にも、本研修では、各現場の最前線でご活躍される講師の先生方から、数々の貴重なお話をうかがうことができた。固定概念やイメージで判断せず、現場の今を知ること、そして、当事者意識を持つことの重要性を、心に刻むことができた。

最後に、本研修名にある「リーダー」について考えたとき、現場で指揮する人だけを指すのではなく、誰もやらないようなことを率先して行える人や、自ら行動できる人も、リーダーと呼ぶにふさわしい。異なる人たちと共に生きる社会を考えていく上で、自らの考えや、正しいことをきちんと意見できる人も、リーダーといえる。一方で、周りの人の支えによって成し遂げられることも多い。私は生活チームのリーダーとして、チーム員のサポートに救われた部分が多い。リーダー、リーダーを支える者、どちらも国際社会を生きる力として大切であり、両者を学ぶ研修にもなった。

福岡県は、グローバル都市を目指す一方で、働く女性が多く、私はその一人として本研修に参加させていただいた。このような機会を得られたことは、大変貴重なことであり、誰もが経験ではない。全ての方に心から感謝するとともに、年齢に関わらず、幾つになっても、男女ともに、挑戦し続けることができる社会、風潮を、福岡から発信し、これからの国際社会を力強く生きる次世代のリーダーを育む環境づくりに貢献していけるよう、努めていきたい。



本物を視ること、感じること

原島 真衣

福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科



インターネットの検索だけでは知ることのできない世界を自分の目で見て、感じたい。大学生になって一番に思ったことだ。「福岡県グローバル青年の翼」に参加してミャンマー、マレーシアの今を知りたいと思った。そして今後の将来を創る世代がどのような考えを持っているのかに興味を持った。

国内研修が始まって大学の講義では聞くことができない様々な分野の講義を聞くことは、難しく頭を抱えることも多かったが、今まで知らなかったことを多く吸収することができ視野が広がった。また今まで授業でしか学んだことのなかったミャンマーやマレーシアの社会情勢や歴史、民族の話を聞くことは大変興味深く、海外研修が待ち遠しくなった。

8日間の研修は日本では体験できないことばかりで、観光旅行でも体験できないことばかりで刺激的な毎日だった。特にミャンマーとマレーシアどちらにおいても同年代の方と話す機会があり、彼らが日本についてどのように思っているのか、将来をどのように考えているのかは私たちとは異なる考えを持っていて大変興味深いものだった。

OISCAの研修生とのディスカッションでは趣味や将来、日本のことについて話した。同じグループにいた3人の研修

生は農業技術を学んで自身の村に持ち帰り、村の農業をさらに発展させたいという明確な目標を持っていた。私は将来の夢を聞かれても彼らのように明確に答えることができず、将来に対する意識の違いが浮き彫りに感じられた。

マレーシアでの夕食交流会では現地の大学生と話す機会があった。彼らは英語とマレー語を話しより良い仕事に就くために勉強しているといった。2020年までに先進国になるというマレーシア政府の掲げる目標は彼らのような若い世代の活躍によって達成するのだろう。

二つの国の同世代の若者の両方にいえることはどちらも将来に明確な目標を持っていることだ。そのために日々鍛錬を怠らない。そのような印象を強く受けた。またどちらの若者も日本に興味を持っていて、OISCAの研修生は日本で研修がしたいと、マレーシアの大学生は日本に留学がしたいと語っていた。日本という国を客観的な視点から考えるきっかけとなった。

今回の研修で出会った若者が将来日本に来たとき、日本はどのような国になっているのだろうか。私は今回の研修を通して学んだことを少しずつ日本に、福岡に恩返しし、わずかながら世界に誇れる福岡を創る一人になりたいと思った。



異国の地で目にした忘れられない光景、人々との出会い

福田 小夏

九州大学 教育学部



実際に足を運び、五感でその土地を感じ、人々の目を見て会話することは想像していた以上に多くの言語化できないような感情を生み出してくれる。それを身をもって経験した国内研修、ミャンマー・マレーシアでの研修であった。私が福岡県グローバル青年の翼のことを知ったきっかけは前年度の団員であった大学の先輩との些細な会話であった。以前から興味を持っていたICTを利用した教育の他国での実情を垣間見ることができるかもしれないと考え、応募に至ったが研修を通じて得られたものはそれ以上のものだった。まず心に残ったのがミャンマーのオイスカ研修センターでの同世代の研修生たちとのディスカッションである。彼らは農業を学ぶためにミャンマーの各地から家族と離れ、研修センターで早朝から夕方まで座学や農業実習に励みながら生活している。そんな彼らに「家に帰りたくなることはないの?」と質問した。私はある一人の女の子の「農業を勉強しに来ているから、しっかり技術を身に着けるまでは帰りたくない。」という答えに胸を打たれた。日本では教育、もしくは技術指導という分野に関して国内での

格差はあるものの当たり前ものとなっており、その女の子のように熱意や一種の使命感を持って学びに向かうことは少ないように感じる。そのような学びへの態度・視点を多くの人に伝え、「では自分はどうあるべきか?」ということを各々が考えることが日本の教育の質や学びに対する意識の向上の足掛かりになるのではないかと考えた。マレーシアに移動してからは成長著しいクアラルンプールのビル群に圧倒され、急成長を遂げる都市の熱気を感じた。華人系小学校訪問では英語を用いた授業の中で生徒が積極的に発言する光景や、人種の違いを動物の種類の違いに見立てた道徳の教科書を利用して多民族共生に必要な視点を早くから身に着ける姿を目のあたりにし変わりゆく世界に対応して教育現場も変革していくのを感じた。これら私が約1週間間に多くの人に会い、見て、聞いて、感じる事ができたことを心に留め、今回の研修で学んだことを生かしてこれからの大学生活を有意義に過ごしていければと思う。最後になりましたが、福岡県グローバル青年の翼に関わり私たちの学びを支えてくださった方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。



自分の目で見ることの大切さ

藤原 奈々

杉村包装資材株式会社 管理部



私は社会人3年目で仕事に慣れてきていた頃、会社から「福岡県グローバル青年の翼」を紹介して頂きました。仕事上、社内の方としか接することがなく、また毎日同じことの繰り返しだったため、何か新しいことに挑戦したい・いろんな方と交流をしたいと思っていたため、参加することを決意しました。正直、海外に興味がありませんでしたが知識も少なかったため不安からのスタートでした。

その不安を少しずつ消してくれ、また海外に興味を持たせてくれたのが国内研修でした。

国内研修では、たくさんの方々に講義をしていただきました。その中で、オイスカ西日本研修センター研修課長の彦坂様からオイスカ・パコック研修センターについての講義や北九州市立大学准教授の篠崎様からマレーシアの人種・宗教・文化についての講義の内容が海外研修に直結していて大変不安を解消してくれた講義でした。また他の団員の海外に対する視野の向け方に刺激を受け、興味を持つようになりました。

実際に海外研修に行かせて頂いて印象に残っているのが、ミャンマーでのオイスカ研修センターです。研修生とのグループディスカッションや夕食交流会、農業体験などをさせていただきました。まず、研修生とのグループディスカッションでは、隣に座っていた19歳の青年に目標は何か質問をすると「家族のため、自分の村のために農業の技術・知識を身に付けたい」と言われていました。あまり年は変わらないの

にしっかりして、自分のためではなくまず人のために頑張ろうとするその姿に感動しました。それと同時に自分が恥ずかしくなりました。

日本や福岡のことを教えてあげたいと思い携帯で写真を見せたり、絵を書いたり、日本語を書いてあげたりすると大変喜んでもっともみたくもっと教えてほしいという反応でした。常に笑顔で目が生き生きして、いつか日本に行きたいと言ってもらえました。夕食交流会では、研修生の方々による出し物や様々なミャンマー料理でおもてなしをいただきました。様々な民族衣装や伝統舞踊を披露していただき、ラブストーリーが多いように感じ大変印象的でした。海外研修に行く前までは、ミャンマーについて詳しくなかったのですが、発展途上で貧しく怖いというイメージでした。しかし実際に行ってみると、筋肉質な野良犬やヤギや牛などが群れていたりするところでもほとんどの方がスマートフォンを持っていたり、同年代の方々の農業の技術・知識を身に付けたいという向上心のごさ、生活面では貧しいところもありますが、暮らしている方々は笑顔で幸せそうに見えました。今後どのように発展・成長していくのか大変興味深いです。

今回、この研修に参加をして普段生活をしていて絶対に経験することのできないことをたくさん経験すること・実際に行かないと見られないものを自分の目で見る事ができました。私のこれからの人生に大きな影響を与えられたと思います。この機会をくださった会社、そして出会った全ての方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



地盤を固める

山崎 一輝

九鉄工業株式会社 北九州支店 土木課



私は、主に九州内での仕事をしている。仕事の内容としては、鉄道駅近くでの仕事が多く、駅利用者に関わることも少なからずある。国内での仕事だが、最近、他国のお客も増え、英語での会話を求められる。その際に私では、対応しきれず他の方をお願いするが、その事を悔い、英語でのコミュニケーション能力を向上させたいという想いから、今回の研修プログラムに参加した。

参加当初は、国外に視野を向けるという事で、海外、異文化等について理解を深めるものと思っていた。しかし、第1次研修では、国外に目を向ける前に、国内、もっと言えば自分の住む県内から知ろうという事で、福岡県についての見識を深めた。その中で、以前小学生の団体で海外研修を行ったという話があった。当時の方が国外に出た際に、自国の事について質問をされたが、答える事ができなかった、と後の報告会で泣き崩れたという話が特に印象に残っている。当初の私が思っていた様に、自国の事も知らずに国外に目を向けるのは、それほど恥ずかしいことであると思知らされた。その後は、海外研修で訪れるミャンマー・マレーシアについての講義があり、その中で、両国との関係や、食文化、宗教

等について学んだ。特に食文化のハラルについては、これまでの生活で気に留める事が無かったので、特に関心を惹かれた。この時点で参加当初の目的とは異なり、自分の目で両国を見てみたい、との思いが強くなっていた。

オイスカ研修センターでの話の一つだが、ミャンマーでは、以前、化学肥料を使用した農業を行っていた。化学肥料では、残留農薬が残り、土壌が悪くなるという事で有機肥料を使用したほうが良い。しかし遅効性の有機肥料では効果が目に見えて実感できないため、説得力を持たせるため、同じ土地でボカシ肥料を使って農業を行っていた。実際に農作物を育て、現地の方に勧めることで、肥料の効果があると認められ、普及していた。ミャンマーの方が皆歓迎してくれたのは、地道に力を入れて取り組んだ方々のおかげであり、その事に対して相手が答えてくれたものなのだと感じた。

最後になりますが、貴重な講義をして頂いた皆様、視察を受け入れて頂いた皆様、ありがとうございます。また、各種日程の調整等して頂いた方、各関係者の方々のおかげでこの様な貴重な経験ができました。「外に目を向ける前に自分の周りから」「全力で取り組みれば相手は答えてくれる」等、学んだことはまだまだありますが、今回得たものを忘れず、業務に反映させられる様、積極的に活動していきたいと思います。



明確なビジョンの形成

興梠 汐音
西南女学院大学 人文学部 観光文化学科



今年から大学生になり、行動の幅が広がり自分の時間が確保できるようになった今、「考えてばかりで行動を起こさなかった自分を変えたい。」と思っていた。そんな矢先に、福岡県グローバル青年の翼という事業を知り、応募を決意した。

9月から2度行われた国内宿泊研修では、ミャンマー・マレーシアの基礎知識、日本のインバウンドなどについて再度学習した。講義を受けていく中で、現在も活躍されている講師の方々のお話を聞くことはもちろん、団員である大学生・社会人の疑問点や見解を聞くことは、とても興味深く自身の視野を広げる良い機会であった。また、テーマ別研修である第二次研修では、福岡県の代表的複合型商業施設である、キャナルシティ博多と博多パレインモールby TAKASHIMAYAを訪れ、インバウンド施策や、現在感じているインバウンドの現状・変化についてお話を伺い、外国人観光客のニーズが「日本の質のいいもの」を求めように変化していることが分かった。

海外研修では、自身として初めて東南アジアを訪れた。ミャンマー・マレーシアの土地・人・文化、全てが新しく、感動と興奮の連続だった。

最初に訪れたミャンマーでは、地方と都会で差があるものの、どちらも私が想像していたよりも栄えていることに驚いた。また、村や小学校・市場など、どこに訪れても現地の方は笑顔で出迎えてくれ、どうにかコミュニケーションをとろうと話しかけてくださる姿勢がとても印象に残っている。何より一番衝撃的だったのは、ミャンマーの空港を出てすぐに

鳴り響くクラクションの音だった。道路は整備されているものの、信号機や誘導線がないため、車の行き来が激しく、車同士がクラクションを常時鳴らしあっている状態は、日本では見かけることのない光景であり、ミャンマーのこれからの成長について考えるとともに、日本の交通の安全性が身に染みした。

次にマレーシアのクアラルンプールでは、交通と商業の面から、マレーシアの発展を目の当たりにした。マレーシアの研修で一番印象に残っているのは、企業の方々や現地の大学生との夕食交流会で、マレーシア政府観光局の方々とお話をしたことである。特に外国人観光客への「私たちがお客様を選ぶことはできない。観光客にどうしてほしいという自分たちの思いは二の次で、マレーシアに行ってみよう、楽しかった、綺麗だった。という思いを、家・国に持ち帰ってほしい」という言葉を聞き衝撃を受けた。どこか、日本人と外国人の違いを見つけ、それぞれへの対応に差異をつけてしまう日本の姿勢とは打って変わったものであった。

「将来、生まれ育った北九州市の活性化活動に貢献したい。」という漠然とした思いを持っていた私にとって、今回の海外研修は、より具体的なビジョンを持つきっかけとなったといえる。福岡県グローバル青年の翼は、自身の知識不足を痛感する研修でもあったが、それ以上に、自身の成長を感じることのできる研修であった。これからは、今の将来に対する漠然とした思いを、より明確なものにしていけるように励んでいきたい。



ミャンマー・マレーシアを肌で感じ、考えたこと

鳥嶋 日菜子
福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科



「近いようで遠い東南アジアに行ってみよう」私がこう思うようになったきっかけは、大学の講義で東南アジアについて学ぶようになったことです。様々な国の歴史や民族紛争、現在の社会状況などを学んでいくうちに実際にその国を訪れて自分の目で見たいと考えるようになりました。そんな私にとってこの「福岡県グローバル青年の翼」はとても魅力的だったため、応募することにしました。

第一次・第三次研修では研修先であるミャンマー・マレーシアについて様々なことを講師の先生方に教えていただきました。2つの国のことを詳しく学んでいくうちにますます興味をもつようになり、海外研修への期待が増していきました。

8日間の海外研修は私にとって毎日が刺激的で充実したものでした。はじめに訪れたミャンマーではオイスカ研修センターでの研修生との交流が最も印象的でした。意見交換会の時に、研修生たちは家族と離れてこの研修センターで農業を学んでいることを知りました。そして彼らは家族を支えるために農業技術を得たいと話していました。それを聞いてまだ将来の夢が決まっていなかった自分がとても恥ずかしくなりました。また夜の交流会では私たちのためにミャンマーの伝統的

なダンスを披露してくれました。最後の方には私たちと一緒にダンスを踊って、楽しい時間を過ごすことができました。言葉が通じなくても分かり合うことができるということを感じ、感動しました。

次に訪れたマレーシアでは経済発展の著しさを感じました。多くの高層ビルが立ち並ぶクアラルンプールの景色は今までに見たことのないほど近代的でした。視察で訪れた華人系の小学校ではマレーシアらしさを感じることができました。それは英語教育に力を入れていたところからです。英語はマレーシアで生活するために必要な言語だと先生がおっしゃっていて、やはり多民族国家だなと思いました。また、授業の様子を見学したときほとんどの生徒が挙手をしていて勉強に対する意欲の高さを感じました。夕食交流会ではマレーシアでお仕事をされている日本人の方々とお話をすることができました。日本を離れてマレーシアで働くことの大変さや、マレーシアでの生活、日本との違いなどどれも興味深いものでとても勉強になりました。

今回の海外研修ではたくさんの人と出会い、交流する中で日本という狭い枠で物事を考えるのではなく、国際的な視野を持つことが大切だということを感じました。将来はグローバル人材として活躍できるように頑張ります。



文化の違いを肌で感じる素晴らしさ

濱砂 悠
大刀洗町役場 建設課 管理係



さまざまな国の文化を知り、国際的な視野を身に付けたいと思いこの研修に参加させていただきました。私が勤めている大刀洗町は、人口約1万5千人の町ですが、外国の方を見かけることは多くあります。今後はもっと外国の方が増えていくと思うため、国際的な視野を持つことが必要だと思っています。

今回の研修ではミャンマーとマレーシアに行き、さまざまな文化の違いを感じました。ミャンマーのオイスカ農業研修所にて、ミャンマーでは人体に影響が出るほどの農薬等を使い作った農作物が少なくない講師の方が話されていました。そのため、この研修所では安全な農作物を確保するために、研修生へ研修を行っていました。その環境のなかで、オイスカ流の農作物は差別化されたもので、ビジネスチャンスがあるのではないかと聞いたところ、ミャンマーは貧乏な人は多いが、食べるものには困っていないため、お金を稼ぐことが重要ではないと思っている人は少なくないとの答えが返ってきました。ここで私は、環境や文化の大きな違いを感じました。

また、マレーシアでは小学校を訪問し、授業視察や交流会等を行いました。そこは、華人系の学校でしたが、授業はすべて英語で行われていました。マレーシアは多民族国家のため、民族により使う言葉が違うので、英語が使えなければ社会で通用しないというほどの意識の高さでした。また、国際社会で通用するために3言語話者を育てるという狙いもありました。日本の英語教育や国際的な考えとは意識の高さの違いを大きく感じました。他にもマレーシアでは、ハラルやまちづくりについてなど、さまざまな話を聞き文化の違いに驚くことばかりでした。

今日では本やインターネット等で海外についての情報を得ることは簡単にできますが、実際に現地に行き、その環境に触れ、そこの人々と会話をするにより得られるものは比較にならないほど多くあると感じました。私は今まで海外に対し関心のない方だったと思います。今回の研修を通して、海外の文化に触れ、得たものは非常に大きく、今後さらに国際的な視野を広げるために関心を持っていきたいと思えます。そして大刀洗町の職員として住民の福祉の増進のために活かしていきたいと思えます。



新しい視点を持つこと

堀口 貴広
タカ食品工業株式会社 業務課



私が福岡県グローバル青年の翼に応募したのは、海外の文化や考え方を知りその国で大切にされていることを知りたいと思ったことです。普段の仕事では海外の人と接することはありません。海外という異文化を見ること、その中で生活する人と関わることで、自分の視野を広げることができると思ったからです。

今回の海外研修で訪問したミャンマーとマレーシアは、研修前にはほとんど知識を持っておらず、東南アジアの発展途上国というイメージしか持っていませんでした。

ミャンマーのヤンゴンに着いて見た街並みはビルが立ち並んでいましたが、パコックに飛行機で移動し、オイスカ研修センターに向かうところからは、牛車が走っていたり、研修センターでは手酌の水洗トイレや水のシャワーだったり、同じ国でも大きな差があると感じました。しかしオイスカの研修生の方はみんなスマートフォンを使用しており、そのギャップに驚きました。

ミャンマーでの最終日に福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑に献花させていただき、遠い異国の地で、戦没者に思いをはせている方がいること、そして管理をしてくださっている現

地の方がいることを初めて知りました。日本とミャンマーにこのような深いつながりがあることは、この研修に参加しなければ知ることができなかったと思います。

マレーシアでは訪問先の方々に様々な話を伺うことができました。ハラル産業公社の視察で、ハラルの考え方やハラル認証について学ぶことができ、とても勉強になりました。「おもてなし」の心を持つためには相手を尊重すること。普段食べる食事で、自分とは違う考えを持つ人もいることを知ること、お互いを尊重するためには重要だと感じました。

また、この研修を通して日本語だけでなく、英語やその他の言語を学ぶ重要性を感じました。通訳を介してコミュニケーションをとることもできますが、それでは相手の伝えたいことをうまく感じ取れないと思います。交流会の時にうまく会話ができない自分にもどかしさを感じました。

この福岡県グローバル青年の翼に参加したこと、海外の国でも地域によって大きく差があることや、気候が日本と全く違うことを知り、日本の魅力を再認識することができたと思えます。しかし今後も日本だけでなく、海外に目を向けていくことを、日々の生活の中で続けていきたいと思えます。



小さな勇気から大きな成長へ

村上 瑞麗
北九州市立大学 文学部 比較文化学科



大学1年生の後半から、周囲の友人たちが自分のやりたいことを見つけていく中、特に興味を持っているものがなかった私は、せっかくチャンスを作れる大学生なのに、何もしていない自分に焦りを感じていた。そんな時に、昨年度の団員であった高校の同級生のSNSで、ミャンマーの小学校に訪問している動画を見て、その光景にとっても興味をひかれた私は、彼女に話を聞き、この「福岡県グローバル青年の翼」を知った。おおまかに活動内容などを教えてもらった後に、自身でミャンマー・マレーシアのことを調べ、その際私は特に、ロンジーをはじめとするミャンマーの色彩やかな民族衣装に目を奪われた。「チチカカ」という中南米やアジアの民族衣装をモチーフとした衣料や服飾雑貨を取り扱っているお店が好きで、将来はここで働きたいという気持ちがある。そして、このお店の事業内容に、実際に社員が現地に出向き、そこで見つけた商品を帰国後日本人に合うようなデザイン・サイズにアレンジして、海外の工場と品質向上のために協力して生産するというものがある。「福岡県グローバル青年の翼」に参加するか決めきれずにいた私は、この事業内容を知った時、ミャンマーのマーケットなどを視察できるこのプログラムと関連付けることができ、今回参加することを決意した。

「自分の目で、現地のお店に売っている本物の衣装を見てみたい。」

こんなにも何かに関心を持てたのはこの時が初めてだったので、実際にミャンマーのマーケットを訪れた時、とても

感動したのを覚えている。市場全体は薄暗く、自分1人だと「こわい」と感じてしまいそうな場所だった。しかし、私がロンジーを購入したお店の方々はとても優しく、縫い合わせが終わるまでの間、言葉が通じないためジェスチャーではあるが、椅子やお菓子を出してくれたり、近くにいる団員たちにもお菓子をあげてきていいよと言ってくれた。完成後も、ロンジーが渡されるのを待っていたら、巻いてあげると言われ、お店の奥で2人がかりで丁寧にロンジーを巻いてくれた。初めて巻く人は落ちると思うからと、腰紐で固定することまでしてくれ、さらには最後に、一緒に写真を撮りたいと言われ、お店の方全員と写真を撮った。言葉も通じないただの一般人の私に彼女たちはこんなにも優しくしてくれる。私はこの瞬間、これは彼女たちなりの「おもてなし」の心ではないかと思った。

観光・インバウンドチームとして、「おもてなしの心を知る」という目的をもち今回の海外研修に挑んでいたため、ミャンマーのマーケットで身をもって体験することができて本当によかった。

大勢の中で発言したり、意見を言うことに対して臆病で消極的だった私が、当初まだ見ぬ人たちとともに国内・海外研修を行うというこのプログラムへの参加を決意するには勇気がいることだった。しかしその勇気を出せたことで、今では積極的に発言、会話ができるようになった。海外研修から帰ってきてから、周囲の人たちに「活発になったね」と言われることが多々あり、「福岡県グローバル青年の翼」に参加したことは、私にとって大きな成長だったと思う。



積極性の大切さと新たな発見

安村 夏希
福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科



私は大学生の内にもっと自分の視野を広げたい、自発的なコミュニケーション力・英会話力を向上させたいという思いがあった。また、大学での講義の中で偶然マレーシアやハラルについて学ぶ機会があった。この「福岡県グローバル青年の翼」で昨年はマレーシアに行き、ハラルと食についての研修を行っていたことを知った。私ももっとハラル先進国の現状を知りたいと思い、この研修への応募を決意した。

国内研修では教育、歴史、環境など様々な分野の講師の方々から、この研修でしか学べなかったであろうたくさんの方々のことを教えていただいた。

周りの学生や社会人の方々もそれぞれが明確な目的をもってこの研修に臨んでいたことに私も負けないと思った。私は普段から積極的な方ではなく、最初は恥ずかしくて中々言い出せなかったことも、回を重ねるごとに自分から発言できるようになった。研修をこなしていく内に自発的に意見を述べ、質問することがいかに大切か学んだ。

海外研修で訪れたマレーシアのハラル産業開発公社では、ハラルは食品だけでなく化粧品や薬、ホテルやレストランにとっても大切だということ、ハラルマークがついていることで、原材料の安全が保障されており食の安全や健康にもつながることを教えてくださった。

現地のスーパーに行った際、チョコレートやグミなどのお

菓子にさえもハラルマークがついていたことがとても印象的だった。また、ノンハラル食品を販売している場所が別にあった。この様な、ムスリムやそれ以外の人への配慮が、マレーシアのハラル施策が進んでいることや、多民族国家たる理由なのだろうか知れた。そして、ハラルが福岡にもっと外国人観光客を呼び込むための重要な鍵だと再認識することができた。

また、マレーシアの華人系小学校では一年生の英語の授業を見学させてもらったが、先生は授業中すべて英語で話し児童たちもそれを理解していた。先生の問いかけに対しては皆が積極的に手を挙げていた。そういった光景に日本との学校教育の違いを感じた。

国内研修・海外研修を通して学んだ多くのことはインターネットでは知りえない、文化や価値観の違いなど実際に自分で体験しないと分からないことばかりですべてが新鮮だった。外からの視点で日本を見ることで、日本の善し悪しを再確認できた。また、今回訪れたミャンマーとマレーシアは発展度合いが違っても、どちらもまだまだ成長しようとする向上心が人々や街の雰囲気、国全体で感じ取ることができた。私自身もその姿勢を見習って、常に向上心を持って何事にも積極的に取り組んでいこうと強く思った。いつの日か福岡やアジアに貢献できるようにこれからも日々邁進していきたい。



視野のグローバル化へ

横大路 貴哉
正興電機株式会社 電力営業部



私が今回海外研修へ参加した目的は何をするにも固定概念を持ってしまっている自分を変えたい、何か刺激を受けたいと考えたからです。

研修に行く前はミャンマーとマレーシアは同じ発展途上国としてひとくくりで考えていて言い方が悪いですが日本より劣っていると考えていましたがまったくの勘違いでした。ミャンマーは日本の経済成長期と同じ動きをしておりビルなどが多く建設されていて今後の経済発展が期待でき10年後は日本より経済発展しているんじゃないかとポテンシャルの高さを感じました。マレーシアのKLについては高層マンションや建物が立ち並び尚且つ自然もきちんと残っていて正直日本より全然経済発展しているんじゃないかと感じ、自分が井の中の蛙だったことを思い知りました。

自分の知らない所でA E ON、伊勢丹など色々な会社が海外に進出して成功を収めていて、その方々が皆、口を揃えて言ったのがこれからは日本人を相手するだけでは生きていけない時代になるということです。確かに日本は今後少子高齢

化等で経済が落ち込んでいってと言われており実際に東南アジアの経済発展を目の当たりにした私は深く納得し強い危機感をもりました。

色々な企業の方からお話を聞いてどうすれば海外で成功できるのか、今後のビジネス展開の鍵等のお話を聞いてとても勉強になったと同時に成功した人たちは共通してポジティブで自分に自信をもっているという印象をもちました。逆をとればそういう人じゃないと海外で生き残れないんだと思いました。

今回、海外研修に参加させて頂いて自分の今までの考え、常識が一掃されグローバルな視点を持つようになりました。英語の必要性も改めて感じたため、今後はグローバルに適用できるよう英語をある程度話せるようになることと、自分がやれると思ったら怖がらず積極的に行動し、成功を重ね自分に自信を持つこと、そして近い将来来るであろうグローバルな時代に対応できる人材になっていきたいです。

最後になりますが、今回私どもの研修に携わってくれた方々に深く御礼申し上げます。

事務局から一言

半年間に渡る研修を無事に終えて

福岡県青少年育成課 藤川 為廣

平成29年度の「福岡県グローバル青年の翼」は、9月から3月末までの半年間にわたり実施してきました。この事業は、前身の事業である「福岡県青年の翼」と「福岡県青年の船」から数えて47年目となる長い歴史を持つ事業です。時代の流れと共に内容を少しずつ変えながらこれまで多くの団員が参加し、今年も23名の団員が参加しました。この歴史の中に自身も担当として携われたことは大変光栄でした。

彼らのために、国内・海外の研修で貴重な講義を頂いた講師のみなさま、フィールドワークにご協力を頂きましたみなさま、視察を快く引き受けて頂いたみなさま、そしてこの事業を様々な形でご支援頂きましたみなさま、本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。是非、今後の彼らの成長を温かく見守って頂ければと願っております。

そして、23名の団員のみなさん、半年間に及ぶ研修期間の間、最後までよく頑張ってくれました。国内での3度の宿泊研修では多くの講義とグループワーク、海外の研修では連日早朝から深夜まで続く行事の数々と、かなりの密度で研修を行いました。その全ての研修においてみなさんは積極・果敢に挑んでくれました。



今年の海外研修の地は、発展途上にあり、これから大きな成長が見込まれるミャンマーと、一定の発展を遂げ、今後日本も多くの点で参考にしなければいけない多民族国家として成長するマレーシアの2カ国でした。世界で多くの国がある中でたった2カ国、1週間程度の訪問でしたが、この限られた中でもこれまで生きてきた人生の中では出会う事が無かったものばかりだったと思います。情報化が進む世の中で、大抵の必要な情報はインターネットで入手できる世の中です。訪問地の写真などを事前に見たことがある人もいたと思います。ですが、実際に訪問して初めて感じる匂いや、温

度、対面しコミュニケーションして得られる考え方の違いなどは、自身の想像を上回る体験だったのではないのでしょうか？

私は、世の中には自分が知らない文化やルール、考え方が常に存在し、その中で生活する人がいると認識することは、研修のテーマの一つである、「国際的な視野を持つ」という事につながるとも大事な事だと考えています。団員のみなさんには、是非とも自分がこれまで生きてきた既成の理論や概念にとらわれず、水平思考を持って自身の活動される場で今後ますます活躍頂きたいと思っています。

Special Thanks to

国内研修の講義・視察などでお世話になった皆様

研修	氏名	所属
第1次研修	北見 創 様	日本貿易振興機構 (JETRO) アジア大洋州課
	占部 賢志 様	中村学園大学 教授
	神田橋幸治 様	ビジネスデザインラボ 代表
	田中 克明 様	田中藍株式会社 常務
	本松 洋 様	オーケー食品工業株式会社 海外営業室室長兼営業企画部課長
第2次研修	豊島 茂 様	公益社団法人福岡県観光連盟 観光推進プロデューサー
	柴田 恭男 様	東神開発株式会社(博多リバレインモール) 営業本部 九州事業部 博多グループ 営業担当チーフ
	津留佳奈恵 様	福岡地所株式会社(チャンネルシティ博多) チャンネルシティ博多事業部 広報インバウンド担当
	石橋 洋明 様	石橋工業株式会社 取締役
	平田 敬介 様	大刀洗町立 大堰小学校 校長
第3次研修	川崎 恵 様	学校法人都築育英学園 リンデンホールグループ 小学部 教頭
	石橋 栄作 様	学校法人都築育英学園 リンデンホールグループ 小学部 事務局長
	彦根 延良 様	公益財団法人オイスカ西日本研修センター 研修課長
	長根 寿陽 様	株式会社メディカルグリーン 開発事業室室長
	篠崎 香織 様	北九州市立大学 外国語学部国際関係学科 准教授
第5次研修	Aldo Bloise 様	IT & IP Strategy Advisory Deputy General Manager
	Joelle Bloise 様	IT & IP Strategy Advisory General Manager
	水谷みずほ 様	合同会社みずトランスコーポレーション 代表取締役 社長
第6次研修	花野 博昭 様	合同会社みずトランスコーポレーション 代表取締役 副社長
	平 ゆいこ 様	NPO法人循環生活研究所 理事長
	大井 忠賢 様	株式会社BOOK 代表取締役社長
第6次研修	朴 康秀 様	北九州市立若松中央小学校 民族学級講師
	前川 健太 様	一般社団法人 フレッサ福岡 代表
	栗崎 純一 様	一般社団法人 フレッサ福岡 GM 兼 監督
	林 裕子 様	日本貿易振興機構 (JETRO) 福岡 所長代理
	吉田 明弘 様	日本貿易振興機構 (JETRO) 福岡 農水産・食品アドバイザー
	南場 一輝 様	日本貿易振興機構 (JETRO) 福岡 係長
	九州産業大学farm3.0一同 様	
	坪根 浩幸 様	北九州市立 藍島小学校 校長

海外研修の視察・交流会などでお世話になった皆様

氏名	所属
木附 文化 様	オイスカ研修センター (DOA OISCA International) Country Director
西垣 充 様	ジェイサットコンサルティング 代表
野田 勝也 様	福岡市 ヤンゴン市 まちづくり協力支援アドバイザー
堤 雄史 様	SAGA国際法律事務所 代表弁護士
許 惜惜 様	Kepon SJK (C) 校長
Datuk Musa Yusof 様	Malaysia Tourism Promotion Board(マレーシア政府観光局) Senior Director
Mohamad Romzi Sulaiman 様	Halal Industry Development Corporation(ハラル産業開発公社) Senior Manager
Muhammad Zaid 様	SPAD (陸上公共交通委員会) Executive SPAD Academy Div.
井上 佑志 様	キューピー マレーシア Director
佐藤 貴也 様	イオン マレーシア Senior Manager
W.Y. LIM 様	L&L CONSULTANT Founder & Director
藤木 雅聡 様	在マレーシア福岡県人会 会長

クアラルンプールの夕食交流会にご参加いただいたみなさま

オイスカ研修センターのみなさま

Kepon SJK (C) 学校、生徒のみなさま

マレーシア政府観光局のみなさま

ハラル産業開発公社のみなさま

陸上公共交通委員会のみなさま

キューピー マレーシアのみなさま

イオン マレーシアのみなさま

在マレーシア福岡県人会のみなさま

福岡県グローバル青年の翼にご協力をいただきました全てのみなさま、

団員一同、心より厚く、熱く御礼申し上げます。



📷 Snapshots with Message



1 班 Snapshots with Message



安部 かりん

Profile p32

KLタワー前にて現地でお世話になったリムさんと。マレーシアの発展を象徴する高層ビルの数々とその眩しさに圧倒されながら、日本の伝統的な衣装である浴衣を着て写真を撮ることができたのはとても刺激的で、一生忘れることができないとても貴重な体験でした。



金高 誠生

Profile p34

ミャンマーのシュエダゴン・パゴダでの1枚。シュエダゴン・パゴダはヤンゴンの中心部にある寺院で、黄金に輝く仏塔が立ち並ぶ中、1人の男性が大樹に向かって座禅を組み礼拝している姿が目に焼き付いて離れなかった。



阿部 竜弥

Profile p32

ミャンマーで訪れた村にて。村の方々が実際に生活している家屋の写真です。都市部のコンクリート造の建物とは違い、木、竹、葉で作った建物で生活しており、暮らしの違いに驚きました。質素な生活環境ですが、ミャンマーで出会った方々はとても優しく、満ち足りた生活を送っている印象を受けました。



末永 瑞穂

Profile p34

ミャンマーの朝市。澄んだ空気と活気のある声、バイクのクラクションの音、舗装されていない道。日本とは違った市場を体験することができた。まるで、タイムスリップしたようだった。



伊藤 大将

Profile p33

ミャンマー滞在三日目、朝市を訪れたとき一枚。通りに多くの女性が肉や野菜、果物を広げ、商人と買い物客で賑わっていた。帰り際に6個入りの約20円で売られていたミャンマー風の揚げ物を食した。外はさくっ、中はふわふわで非常に美味だった。



高橋 和佳子

Profile p35

マレーシアの子どもたちに囲まれて。好奇心に目を輝かせる子どもたちに笑顔と感動をもらいました。



片山 歩美

Profile p33

クアラルンプール宿泊先のホテルの屋上にて。ミャンマーとは比べ物にならないほど街に光が溢れていてまぶしかった。きれいだと思う反面、どれだけ私たちは電気の無駄遣いをしているのだろうかという気持ちになった。



田中 愛

Profile p35

ミャンマーで出会った村の人々。訪れた私たちを笑顔でもてなし、まるで家族を迎え入れるかのように接してくれました。ミャンマーの人の心の優しさに触れ、自分の気持ちがあたたかくなっていくのを感じました。



2班 Snapshots with Message



樽林 万葉

Profile p36

マレーシア、華人系小学校での一枚。英語の授業と一緒に参加させてもらった。子供たちは元気いっぱい、私たちとも積極的にコミュニケーションをとろうと、たくさん話しかけてきてくれた。みんな笑顔がとっても可愛らしかった。



小池 恭兵

Profile p36

ミャンマーの寺院近くで出会ったポストカードを販売する子どもたち。子どもたちの笑顔が見たくてすぐに購入。1枚約10円。20枚購入した時の子どもたちの純粋な笑顔に癒されました。

そのまま空港でそのポストカードを利用し家族や友人へ国際郵便を届けました。



平 ひかり

Profile p37

ミャンマーの民族衣装ロンジー。想像以上に様々な模様や色があったことには驚いた。仲間と楽しみながら着用し、ミャンマーの街を歩いたことは何よりの思い出である。



野坂 ゆい

Profile p37

ミャンマー、OISCA研修所での一枚。交流会を終えた後、OISCAの研修生たちが部屋に招いてくれ、にこにこしながら日焼け止め効果のある「タナカ」を顔に塗ってくれた。暑い温度の中、「タナカ」をつけるととてもひんやりとした。



原島 真衣

Profile p38

この写真はOISCA研修センターでの農業体験後にOISCAの職員のバイクの後ろに乗せてもらった場面です。日本ではバイクに三人乗りはありえない光景ですがミャンマーの特に村落では当たり前の光景でした。スリルを味わいつつ、しかしながら楽しいひと時でした。



福田 小夏

Profile p38

ミャンマー・バガンにてバス車内からの一枚。十数世紀も前からその流域に様々な王朝が興亡したイラワディ川です。世界史の教科書で見たこの川や遺跡群を実際に目にし、人々に出会って感じた思いを胸に刻みながら、第二の目的地であるマレーシアに向かいました。



藤原 奈々

Profile p39

ミャンマー バガンの観光地にて小学生くらいの売り子達がたくさんいました。

可愛いね！買って買って～！など簡単な日本語で話しかけてくれました(笑)

また、アジア人には日本語・中国語など、欧米人には英語で対応していて大変驚きました。



山崎 一輝

Profile p39

ミャンマーのとあるシュエダゴン・パゴダにて。寺周辺を回っている間に、多くの人が祈りを捧げていました。単純に真似ただけですが、心が洗われた様な気がしました。



3班 Snapshots with Message



興梠 汐音

Profile p40

ニャンウー空港での一枚。OISCA研修所では、研修生達とコミュニケーションを取るだけでなく、将来への意欲を目の当たりにすることで、「自身もっと成長しなければ!」と奮い立たされることばかりでした。この思いを胸に、日本で活躍できる人材として羽ばたきたい、という思いも込めてこの写真を選びました。



鳥嶋 日菜子

Profile p40

ミャンマーの朝市の様子。
タナカを塗った女性たちが野菜や果物を道端で売っていました。
日本の市場とは違ったのでとても印象に残っています。



濱砂 悠

Profile p41

マレーシアの王宮は門から遠く遠く離れたところにありました。門には観光客がたくさんいましたが、中は静かそうでした。非常に綺麗な建物で日本では見られない風景でした。



堀口 貴広

Profile p41

ミャンマーの市場を訪れた時の写真です。
独特な匂いが漂い、様々なものが並べられた店先。
言葉が通じない中で値段交渉など、普段できない体験ができました。



村上 瑞麗

Profile p42

バガン・ニャンウー空港からオイスカ研修センターに向かうバスの中の写真です。1時間前の写真ではみんな元気に笑っていたのですが…。整備が完璧ではない凸凹の道に行くバス内にも関わらず、みんなが寝ているこの一枚が私のお気に入りです。



安村 夏希

Profile p42

ミャンマーでの滞在先のホテルから徒歩3分のコンビニ。周りには何もなく、闇夜で眩しいほどに存在を放っていた。店内は日本のコンビニよりも豊富な品ぞろえで驚いた。



横大路 貴哉

Profile p43

A EONスーパー内での写真。
マレーシアは日本の物価の3分1と言われているのに日本のお菓子の値段は日本より3倍もすることに驚いた。それでも売れている日本のお菓子、、、すごい。



第2回 福岡県グローバル青年の翼(2017) グローバル&ローカル・リーダーシップ・プログラム 募 集 要 項

1. 目 的

県内青年に、世界(アジア)を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

2. 主 催

福岡県グローバル青年の翼実行委員会(以下「実行委員会」という。)

3. 事業内容

(1)募集人員 24名

(2)全体の研修スケジュール

- ① 第1次研修(宿泊) …9月2日(土)～3日(日)
郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等
- ② 第2次研修(フィールドワーク) …①と③の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察
- ③ 第3次研修(宿泊) …10月14日(土)～15日(日)
訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等
- ④ 第4次研修(海外研修) …11月5日(日)～12日(日)
現地企業や産業インフラ、NPO法人、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設の視察・体験、現地で活躍する日本人などとの交流等
- ⑤ 第5次研修(宿泊) …12月2日(土)～3日(日)
海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等
- ⑥ 第6次研修(フィールドワーク) …⑤と⑦の間の任意の日
これまでの研修を受けての県内フィールドワーク
- ⑦ 報告会 …3月中のいずれかの日曜日(予定)
研修成果報告会
※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

(3)海外研修

日時 平成29年11月5日(日)～12日(日) 7泊8日
訪問先 マレーシア(クアラルンプール)、ミャンマー(ヤンゴン・バガン・パコック)
※訪問国(都市)は、変更になる場合があります。

※ 海外研修の内容について

①目 的

産業・ビジネス・文化・社会貢献活動等の分野で、発展し続けるアジアの現状を体感するとともに、福岡(日本)が海外に打って出る姿を学ぶことにより、国際的視野を身につけ異文化交流について理解を深める。

②研修内容

・現地企業や産業インフラ、企業、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設、社会貢献活動視察、現地で活躍する方との交流会等
例：都市計画・インフラ・工業施設・現地企業の視察・訪問、多民族融和(ムスリム政策)・文化施設等の視察、日本や現地NPOの社会貢献活動の視察・体験、夕食交流会の開催

4. 募 集

(1)募集人員 24名

(2)募集締切 平成29年6月29日(木)

(3)応募資格 ①～④のすべてに該当する者

- ① 県内居住者で、平成29年4月1日現在、満18歳～30歳の者
(昭和61年4月2日～平成11年4月1日生まれの者)
- ② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核となって活躍する人材を目指す者
- ③ 過去2年間(平成27年度以降)のうちに国・地方公共団体等の公的経費(一部助成を含む)によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。
- ④ 健康状態等
・健康で協調性に富み、研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者

・第1次研修から報告会までの全てのプログラムに参加できる者

5. 応募方法

下記の書類をとりそろえ、6月29日(木)までに実行委員会事務局へ直接申し込むものとする。郵送可(当日消印有効)。住所は「10. 問い合わせ先」参照のこと。

- ① 参加申込書…様式1
- ② 返信用封筒(定形郵便のサイズで、住所、氏名を明記の上82円切手を貼付)
- ③ 推薦書…様式2
(参加者の所属する団体内の関係者による推薦とする。ただし、参加者の親族や友人による推薦は認めない。)
- ④ 勤務先所属長の承諾書(ただし被雇用者のみ) …様式3
- ⑤ 作文
この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいか等を具体的に記述すること
・パソコン、ワープロを使用し、1,200字程度にまとめること
・縦A4判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること(タイトルは自由)
- ⑥ 保護者の同意書(ただし4月1日現在で20歳未満の者のみ) …様式4
※上記データは、福岡県庁ウェブサイトよりダウンロード可能です。
[福岡県グローバル青年の翼]にて検索ください。

6. 団員候補者の選考、決定

(1)団員候補者の選考

実行委員会において、第1次選考(書類選考)を行い、結果を7月上旬までに本人に通知する。

書類選考の合格者については、7月9日(日)(予定)に第2次選考(面接)を実施し、8月初旬までに内定者を決定し本人に通知する。

(2)団員の決定

団員の決定は、第3次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第3次研修終了時に行う。
※不相当と思われる者については、それ以後の研修参加を認めない。

7. 経費・損害等の負担

(1)次に掲げる経費については個人負担とする。

負担金	その他の個人負担経費
社会人 120,000円	県内研修に係る経費(交通費、食事代、宿泊費)、パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、
学生 100,000円	海外研修に係る経費(県内旅費、一部の食事代・交通費等)

(2)負担金は、10月に実施予定の第3次研修前までに納入するものとし、納入後は原則として返金しない。なお、負担金納入の有無に関わらず、団員が自己の都合により辞退した場合に生じるキャンセル料等については、本人が全額を負担するものとする。

(3)研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

8. 団員資格の取消し

- (1)団員として不相当と認められる者(研修の無断欠席、悪意を持って研修活動を妨害する者など)については、団員資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取り消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。
- (2)海外研修中に団員の資格を取り消した場合における帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。
- (3)上記二項のいずれかに該当した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

9. 事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に会の活動に関わっていくことが求められる。

問い合わせ先

福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局

〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局 青少年育成課内 電話 092-643-3387